

てゐて驚くことは、この男が客に依つて、一人一人その態度を變へることだ。私は田舎の小商人の息子であるが、田舎の小商人だつてこの男がする程、人々に向つて千變萬化の態度をとつたら、他人の非難は兎に角、一年の中に半ダズン位の藏が立つことは受合ひだと思はれる程であつた。さうして、私自身は、ああ、俺は行末どうしよう、文學なんてつまらない、つまらない、と思ひながら、よい文學の本を讀むと、ああ、やつぱりこの世の中に文學ほどよいものはない、とやつぱり文學にばかり親しみながら、うかうかと蟲のやうに寝て暮してゐたのであつた。

ところが、八木彌次郎はさうではなかつた。彼は、官立の美術學校の、一日として缺席などする事のない、而も特待生であつた。彼の部屋に行くと、まるで本屋の店頭にでも行つたやうに、色色な字を書いた紙片が、少しでも隙間のあるところに張りつけられてあつた。不屈不撓、時は金、天才は努力の別名なり、等、等、彼は面長で、色白で、少し頬骨が突き出てゐて、頬の邊に多少間の抜けた感じはあつたが、可なり勝れた美男であつた。缺點を云ふと、髪の毛が薄赤くてその時分から薄い毛にも拘らず白髪さへ生えてゐたことだ。だから、いつも五分刈にしてゐたが、心持凄味のあるその目と目の間に皺を寄せて、「何でもいい、唯ぐんぐんやればいいのぢや、ぐんぐんやればいいのぢや、」といふのが口癖であつた。どういふ譯か、さう云ふ時はいつで

も右の手の拳を固めて相手の方に突き出すのが癖であつた。彼は又極めて何でもない事にでもひどく負けざらひで、例へば「自然主義といふのは繪かきで云ふと、山本森之助とか吉田博とかいふ人たちだらう、」「それやさうぢやないよ、」「さうだよ、つまり自然を見た通り、わざと机を歪めて描いたり、景色を點々で畫いたりしないで、見たままに、舟は舟、川は川、山は山と當り前に描くのが自然主義ぢやないか?」ところが、君、自然主義といふのは……」とそこで私が多少權威をもつて自然主義の説明を始めて、多少彼の方の旗色が悪くなつて來ると、彼は忽ち右の手を拳を固めて一直線に私の方に突き出して、それを上下に振りながら、「勝ち負けなしぢや、勝ち負けなしぢや、」と叫ぶのが癖であつた。私は彼と別れて最早や十年になるが、彼の白い、幾分凄くさへ見える美しい顔を思ひ出すと、「奮闘は勝利の別名なり、」と認めた紙片が張りつけられて、それがひらひら下つてゐるところの、電燈の笠の下に右の拳を突き出し、「ぐんぐんやればいいのぢや」「勝ち負けなしぢや、」と皺枯れた、憎態な口調で叫んだ様子を、昨日の姿のやうに目に浮べることが出来るのである。

ところが、私が二度目に彼の下宿を訪ねた時のことであつた。その時はもう國の方に行つてゐたといふ、彼の家の人たちは歸つてゐた。家の人たちと云つても五十餘りのお上と、その娘の

三十近い出戻りの女と、その子の七歳位になる子供との三人暮しで、お上の死んだ亭主といふのが軍人だつたとかで、その方から這入る年金と、八木から取る下宿料とで細細と暮してゐたものである。——いや、これは私が後で聞いたことで、その二度目に私が彼の汚れた、いろいろな格言を書いた紙が方々にひらひら下つてゐる、六疊の二階の部屋に上つた時、暫くすると下から茶の道具を持つて、二十六七の、赤い髪の毛を鼠の巢のやうに丸めた、血色の悪い、不器量な顔の女が出て来たが、彼女が「入らつしやいませ」と私に挨拶した時は私はまだ氣がつかないで、この素人下宿にもゐる、女中代りの細君か、出戻り娘ぐらゐに思つて、ただ簡単に頷で挨拶すると、「いつも八木がお世話になります」とつづけたので、驚いて私は彼女の方に坐り直つて、頭を下げ直したことであつた。すると、八木が「これが僕の妻です」とはつきりした言葉で云つたので、私はもう一度びよこりと頭を下げた。やがて、彼女が缺けた茶碗に茶をついだり、小さなお皿に入れた缺餅のやうなものを進めてゐた時、「母ちゃん！」と二階の下り口のところに聲がしたので、見ると、いやに目ばかりぎよろりとした、これ亦ひどく血色の悪い七歳位の子供が首だけをそこに突き出した。すると、その時までわりに平氣で、細君に茶を出さしたり、その邊を片付けさしたりしてゐた八木が、急に尖つた聲で、「おい、下に下りてろ！」と彼女に云つた。

彼女が皿の中の缺餅を一枚掴んで、子供を横抱きにして下りてから、「知らなかつたので失敬した」と私は妙に極りが悪かつたので、頭を掻きながら云ふと、「なアに」と八木は怒つたやうな顔をして一口に云つた。が、後で考へて見ると、何も、私が少しも極り悪がる譯はない筈で、八木こそ云ひ後れてとか何とか云ふべきところなのだ。併し、段々親しくなると共に、私の方から斷りたくなる程、彼の口から私は彼女のことに就いて、いろいろな話を聞かされた。なるほど、當時彼は二十二歳だつたから、あの時梯子段の下り口に、「母ちゃん」と云つて顔を出した七歳の男の子は彼の子ではなかつたのである。彼は十九歳の時に上京して來たので、そこで、下宿した家のその出戻りの娘と出來た時、その時初めて女を知つたと云つた。併し、彼は彼女を生涯の連合にするつもりだつたのだ。現に、直ぐに子供と一緒に彼女の籍を引取るつもりだつたのだが、彼女が長女になつてゐたので、籍だけはそのままになつてゐたが、彼は、私が見ても、あんなに年上で、他人の子まで持つてゐる、而もあんな不器量な女を、どうして好きになつたんだらうと思はれるやうな女を、まつたく見えも外聞もなく愛してゐた。

見えも外聞もなくと云ふと、それから又ずつと後のことであつたが、或る日曜日の午後、私が彼のところへ出かけて行つて、いつもの通り四方山話をしてゐると、ふと話の最中に彼の返事が

とんちんかんになつて来たので、をかしいな？ と私が気が付き出すと間もなく、彼は、急に私との話を打ち切つて、私にちよつと待つてくれ給へと口の中で云つたかと思ふと、その鋭い目と目の間に皺を寄せて、いきなり、それほど物の散らかつてゐなかつた畳の上を片付け始めた。何をするのか知らず？ と思つて、私が黙つて、半分呆氣に取られて見てゐると、彼は畳を一枚上げて、その下の床の上に俯伏せになつて耳をつけた。もうその頃は半分彼の性格が私に分つてゐたので、私は彼が何をしてゐるのか、といふ事がほぼ察しられた。と、彼は尙いらいらした顔を、して又別の畳を一枚上げて、床の上をぢろぢろと眺め廻してから、又もう一枚別の畳を上げて、さうして同じやうにぢろぢろと床の上を検査してゐたが、その中で比較的大きな節穴の明いてゐた部分の上に腹這ひになつて、それにじつと五分間ほど耳をつけてゐた。が、やがて階下に客が歸つて行く氣色が私にも聞えたと思ふと、彼は、初めて床の上から起き上つて、大急ぎで元の通り畳を嵌めて、私に「どうも失敬。」とはつきりした言葉で挨拶して、私とそれまでのやうに向ひ合つて坐つた。その日は何でも階下の母親と男の子供とが寺詣りに行つたとかで、彼の細君が一八留守番をしてゐたのであつた。そこへ何でも男の客が、彼と私とが二階で話をした時、階下に訪ねて来て、上り込んで彼女と話を始めたので、彼が忽ち嫉妬を起したらしかつたのだ。やが

て、細君がそんな事があつたとは知らず、いつになくこにこした顔で上つて来て、「今ね、」と彼女は彼に云つた、「追川さんがいらしてね、いいもの下すつたのよ。あなたにぢやなくつて、私に。」……「何だ、見せて見ろ！」と八木が苦り切つた顔をして云つた。その顔附にかまはず、彼女が左の手に隠すやうにして持つて来た物を、嬉しさうに見せると、それは香水だつた。彼はそれを稲光のやうな早さで手に取つたかと思ふと、いきなり窓越しに往來の方に投げつけた。それと同時に彼精一ばいの鋭い聲で、「階下に下りろ！」と彼女に向つて呶鳴つた。傍にゐた私は、自分が呶鳴られたかと思ふほど、急に心臓が打ち出した程、驚かされた。が、八木が、そのやうな激しい言行の後で、直ぐに私に向つて、何事もなかつたやうな調子で話し始めたのに、私は更に驚かされて、今度は私の方が暫くの間彼の言葉に對してとんちんかんな返事をしたことに違ひなかつた。

さうして或る日のことであつた。私は彼と日比谷公園を散歩したのであつた。私が彼とそんな風に公園などをぶらぶら散歩したことはそれが初めて終りになつた。私こそ散歩などは毎日の仕事の一つにしてゐたが、時は金なりと考へてゐる彼には、その癖、彼はどうかすると私のところへぶらりとやつて来て、例の「ぐんぐんやればいいのぢや」流の無駄話をして行くこともあつた

し、又のらくら者の私が三日に上げず取止めのない話をしに行つても、餘り嫌な顔をしないで迎へてくれたが、兎に角彼に取つて、目的なくぶらぶら散歩するといふやうな事は悪魔の仕事に相違なかつた。が、その時は明らかに私たちは私たちの家から程近い日比谷公園をぶらぶら散歩したのであつた。秋のことで、裕福で幸福さうな人たちが、殊に目につくのは盛装をした一對の男女たちが目に立つた。ぽかぽかして、餘り長く浴びてゐると少し汗ばんで来る程度の、いやに眩しく感じられる日光が、如何にも小春日の日曜らしく輝いてゐた。

「今日はばかに二人連れで歩いてゐるのが多いね、さつきから西洋人にも五六人出會つたが、やつぱりみんな一對づつだつたね、」と私が云ふと、「ふん、」と彼は云つた切りで、大體不斷からそんな風な男であつたが、その日は殊にさうで、何か痛いところでも堪へるやうに、腕をしつかりと組んで、さうすると彼の瘠せた體が節だらけのステツキのやうに見えるのだ。さうして何か重大な事でも考へてゐるやうな鹿爪らしい顔をして、足付は始終石でも蹴りながらのやうな歩き方をしてゐた。私も、手持無沙汰で、つい俯向き勝ちに歩きつづけたが、變に世間のそわそわした日で、「まあ、いいわねえ、」とか「さう、」とかいふ、不斷なら町のどよよしの爲めに掻き消されてしまふ筈の、さういふ女たちの甘い聲ばかりが、いやに耳につくのだつた。さうして地面を睨

みながら歩いてゐるのに、妙に、女の人の白足袋がちらちらと前の方を横切つたり、横の方の道から歩いて來たりするのが、それ等がいやに眩しい程白く光つて見えるのだ。不斷はそんな事、思つた事もないのに、若い女の履物ツて綺麗なものだな、と氣の付くやうな日であつた。それがどうやら私だけの感でなく、八木にも確かにそんな印象の強い日らしくあつた。併し、それは私たちの見聞の狭い爲めで、實際は日曜日の公園といふものはいつてもそんな風なのかも知れない。「君、」突然八木がその持前の掠れたやうな聲で云つた、「この世の中で一體何が一番幸福だと思ふ？」その時ちやうど私たちは噴水のある池のほとりに出てゐたので、私は咄嗟に、「先づこの池の鯉など幸福だらうね、」と云ふと、「鯉ぢやない、我々人間にとつてだ、」と八木は愈よ眞面目につづけるのだつた。云ひ忘れたが、私は彼との二年間程の交際の中に彼が冗談といふものを一度だつて云つたのを聞いたことがない。

「君、」それは繪を描くことか、文學をやることか？……さうぢやないよ、僕はそれは二の次ぎだと今氣がついた。君、この世の中で一番幸福なことは金を持つことだよ。」「さうだね、金を持つことだね、」と私は即座に賛成した。「そして名を擧げることは、その次ぎだよ。」と彼は云つた。「名を擧げることがその次ぎだらうな、」と私は應じた。「ところで、どうだ、この邊の、……さ

うだ、あそこの離れたとこのベンチで一服しようぢやないか？」「さうしよう。」

それから五分ばかりの間、私たちはベンチに並んで一言も言葉を交さずに坐つてゐた。八木は例の如く棒のやうに腕を組んで、頭の中ではいろいろの事を考へてゐたのだらうが、私は唯ぼんやり噴水の池の中の鯉を見てゐた。池の面には鯉共のために、半分溶けかかつたのや、まだ丸のまままで風のまにまに水の上を這つてゐるのや、噴水の水の爲めにぐちやぐちやに潰れたのや、無数の鯉が浮かんでゐたが、満腹してゐると見える鯉共は、稀に通りにかかりに冗談のやうにばかりと突つて行く位で、ゆらりゆらりと游泳してゐるのであつた。此奴等もさして幸福でもないかな？ などと私がぼんやり思つてゐると、

「君、」と突然八木が話しかけた。「藝術だつて、やつぱり金だよ。黒田清輝を見給へ、彼の繪に現はれてゐる、ゆつたりとした何とも云へぬ氣品のやうなものは、彼のやうな裕福な生活にして初めて生れるんだよ。文學にしたつてやつぱりさうだと思ふね。金に何の心配もなくて、好きな時に二つでも三つでも書いておいて、一年でも二年でも机の引出ひきだしにしまつておいて、その間にゆつくり消したり書き足したりして、それから發表して見給へ、どんな才の少ない人がやつても、先づさう愚劣なものはお來ないよ、需要供給の關係から云つても人は有難がるからな。金だよ。金

だよ。」「金だね。」「ところで僕は思ふんだ、我々のやうな無資産家の子に生れたものは、仕様がなから先づ自分でそれをこしらへるんだ、それには日本にのみちや駄目だよ。」「ぢや、渡米でもするかな？」私は、ふとその當時の流行言葉を思ひ出して、出鱈目にさう云つたのであつた。ところが「さうだよ、」彼は相變らず眞面目黙張りで、「僕は今、それを考へたんだよ。渡米と云つたつて、我々のは普通の無學な労働者とは違ふんだからね。それに、何と云つたつて、我々は藝術家だよ。藝術を以て立たうとする人間だよ。血洗ひや百姓の手傳をしなくても、何か外にする事があらうと思ふんだ。……」

「それやあるだらうな。」「あるよ。僕は今、……いや、この間から考へてるんだが、例へばあの横濱あたりの外國人相手に、富士山を描いた漆の繪の額とか、錦繪で張つた團扇とか、樂燒の茶碗とか、あんなものなら僕等に、……君だつて十分繪心があるんだから、譯なく出来るよ。つまり、外國に行つて、あんなものをこしらへて、賣つたつて食つて行けると思ふんだ、どうだ、君も一つ奮發して行つて見る氣はないか？」「行つてもいいね。」「それに、僕にして見ても、これから何年か立つて美術學校を出たら、それから洋行するといふことになるんだが、そんなら今から行つたら、學校を卒業するまでの年限を得とくする譯ぢやないか。我々にとつて學校の免狀なんつてもは何に

もならないんだから。君だつてさうだよ、どうせ今は西洋文學の時代だらう、して見ればやつぱり是非とも洋行する必要があるだらう。」「それやあるよ。」

その時から、私たちはそれ迄よりも一層繁^{しげ}と往來するやうになつた。さうしていつの間にか私も彼と一緒に渡米することになつてしまつた。會ふと彼は私の顔を見る度に渡米に就いての話をした。彼はきつと朝から晩までその事ばかり考へてゐたに違ひなかつた。私も、——否私のは彼と會つた時だけ熱心にその事に就いて話した。例の彼の部屋の方々に張り付けられた紙片の中に、渡米一念、とか、阿米利加より佛蘭西へ、とか、精神一到何事かならざらん、とか、阿米利加は我藝術と我幸福との第一階段也、等といふ文字が新しく見られた。それを見ると、私は何だか變な氣がして來た。或る日、彼が云ふには、「僕たちは是非日本畫を少しやつて置かなければならない。何も君、生活の爲めだからね。それに僕も日本畫といふものは全然新生だ。君も中學時代には繪かきにならう、と思つたことがある位なら大丈夫だよ。で、僕は昨日或る先輩のところに行つて、渡米の決心を明かして、就いてはそれに最も便利な日本畫とその師匠のことを聞いて來たんだ。やつぱり『つけたて』がいいさうだ。」「『つけたて』て何だい?」「『つけたて』といふのはつまり一筆がきさ。それには荒川九畝の門に這入るのが一番いいといふことだつたか

ら、紹介狀を貰つて來た。これから行つて見ようぢやないか?」「行つて見ようかな?」

さうして私は彼の後に附いて荒川九畝の門をくぐつたのであつた。すると先づ應接室に通されて、もうよく覺えてゐないが、何でも四十歳近い、少し歩きにくさうに見える程肥つた、堂々とした婦人が出て來て、私は九畝の家内ですが、と名乗つてから、私たちの來意を聞くと、さうですか、それには東修が幾らで、月謝が幾らで、と誠にはつきりした問答があつた後、私たちは座敷に通されたのであつた。ちやうど九畝先生が五六人の門生に向つて、毛氈の上に置いてある大きな紙に、頻りに筆を動かしながら、ときどき講釋をしてゐる最中だつた。それが一と通り済むまで私たちは暫く座敷の隅で小さく固くなつて坐つてゐた。やがて、門生たちがそれぞれ歸つてしまつた。そこで、九畝先生に私たちが入門したい意を述べると、無論それ等のことは總て八木が喋つたので、私は黙つて八木の言葉の要所要所で頭を下げてゐたのである。彼は流石にそこでは渡米のことなどは打明けないうで、自分は西洋畫をやつてゐる者、連^れは文學をやつてゐる者だが、日本の本來の美術を味ひたい爲めに、たとひどんなに初歩でもいいから、實地に研究したいつもりで、と云ふと、九畝先生は一尺近い頤髯をゆるりゆるりと撫で下ろしながら、「それは結構ぢや、洋畫の人が日本畫の研究をされる事は誠に必要なことぢやと思ひます、また文學といへば同じ藝術、や

つぱり日本畫の研究をなさるのは決して無駄ぢやありません。……」

さうして私たちはその翌日束修料と筆と畫帖とを持つて九畝先生の前に弟子として坐つたのであつた。抑も日本畫といふものは、決して物の形勢を寫す、つまり寫生といふものではない、と九畝先生は私たちの前に畫帖を置いて、筆をとりながら云つた、日本畫は寫意と云つて、物の形骸ではなく、物の心を寫すのです。先づ初めに蘭を教へませう、この蘭の葉ですな、と先生は恐ろしく肘を突つ張つて、筆の軸の先を持つてつーツと葉らしい線を引きながら、これも、だから、形でなく葉の心を描くのです。葉の心といふのは何であるか、又どこに葉の心が描けてゐるか、私たちにはよく分らなかつたが、八木も私も黙つて頷いた。それから又この花です、花は少し水つぽい、だからこの筆には少し水を含まして、と先生は筆の先を水洗にちよつと浸して、さうして物馴れた手附で花を描いて、かういふ風に描くのです、で今度の火曜に來る時まで私のこれを手本にして家で十分よく習つて、その中で一番よく出來たと思ふのを持つてお出でなさい、そしたら又私が見てよく直して上げます、と云つた。さうして私たちは九畝先生の門を出たのであつた。

さういふ風にして、私たちが蘭を卒業して、竹を終つて龜を習つてゐた時のことであつた。實を云ふと、もう私は大分日本畫の『つけたて』には飽きて、止めたくてたまらなくなつてゐただつ

た。だが、そんな事を云ひ出すと、八木がああ掠れたやう聲を震はして怒りさうな氣がしたので、我慢して通つてゐたのだが、龜は大體十六通りの型があります、と九畝先生に吐月峰の上に載せられて煩悶してゐる恰好の龜を教へられてゐた時分、私はたうとう我慢がならなくて、一度病氣と偽つて休んだ位であつた。と、その次ぎの稽古日の火曜日の前日、八木が云ふには、「もうこれで大體日本畫の『つけたて』の要領は分つたね、」「分つたよ、」「我々はさういつ迄もぐづぐづしてゐる譯には行かないから、もう日本畫の方はこの邊で切り上げて、これから少し陶器の研究をしようと思ふんだ。」「……」僕はそれで、實は一週程前から、學校の時間が濟むと、學校の文庫に通つて大分調べて見たよ、これ、」と、彼が出して見せたノオトを見ると、私が驚いたことには、やれ石灰が何パーセントとか、粘土が何パーセントとか、その位のことならまだいいが、それに就いての、一向分らない化學方程式や、英文の陶器論などが蟲のやうな字で細々と寫し取つてあるのだ。こんなものを寫して何にするのだらう？ 私は少し悲しくなる程可笑しさを感じたが、それを堪へて、「君これちや實際の役に立たないぢやないか？」と云ふと、「いや、役に立たんことはない、」と八木は云つて、又別にスケッチブックを出して見せた。それには博物館で寫生して來たものとか圖書館の本から寫生して來たものとか、いつの間にかこれだけ寫したのだらうと驚かれる

程、さまざまの陶器の圖が描かれてゐた。「が、これもこれだが、」と八木が云ふには、「實際の陶器工場も見學しておかないといかん。いつか君の知つてゐる人で、確か茨城縣の何處かで陶器をやつてゐる人があるとか云つてたが、どうだ、そこを見せて貰ふ譯には行かないか？」「それや行かないこともないよ。」

なるほど、私の中學時代の友達で、茨城縣の、上野驛から三時間程で行けるところで、それはちやうど筑波山の麓になるので、名も『紫山燒』と呼ぶ瀬戸物工場を持つてゐる者があつた。私もまだ一度も行つて見たことはないが、八木といふ男は實に記憶のいい男だな、と思ひながら、「それや行かないこともないよ、」が本當になつて、眞夏の或る日、私たちは東京を立つた。停車場を下りたところで、改札口から眞直ぐにつづく街道が石灰を撒いたやうにきらきら光つてゐて丁度私たちの歩いて行かうといふ先を空車を引いた馬と馬子とが三組ばかりが一行になつて行くので、暑さと砂埃の爲めに私が閉口して、傍の赤と青との染分の旗の立つてゐる氷屋で一服休まうと提議したが、八木は、「いや早く行かう、僕はまだ生れてから氷といふものを飲んだことがない、昔は天子様でも氷はお上りになれなかつたんだよ、君、スケッチブックを持つて來たか、君も氣の附いたものは僕と重複してもかまはないから、よく寫しといてくれ給へ、」と云つてゐる

うちに、もう先の氷屋の前を通つてしまつたが、また別の氷屋の前を通つた時、「八木君、頼むから、頼むから、僕はもう倒れさうなんだから、」と云つて私が承諾なしにそこに這入ると、仕方なしに彼も附いて這入つて來たが、彼は、たうとう私が氷水を飲んでゐる間何にも飲まないで、氷屋の若者に紫山燒の工場までの距離を聞いたり、かと思ふと、例の美術學校の文庫から寫し取つて來た陶器論を讀んだりしてゐた。

間もなく、私たちはその陶器工場に行つたが、結局、私たちは、そんなものを實地に見ないで本で讀んだり、空想してゐたりした方が、どんなに楽しかつたらう、と後悔した程、——或る所では、何人もの男が、十年も毎日そればかりしてゐるのかと思はれるほど、熟練した手附でくると轆轤を廻しながら、何を拵へてゐるのかと見ると、つまり、私たちの家で不斷に使つてゐる、土瓶とか、茶碗とかで、私たちが呆氣にとられて、實に馴れたものだ、面白い程うまいものだ、といくら見てゐても、彼等が、米搗のやうに絶えず足を互ひ違ひに踏ん張つたり、餅を煎餅燒の職人のやうに左右に搖すりながら、拵へ上げるものは、先きに述べたごとく、茶碗か、皿か、井か、土瓶とかの範圍を少しも出ないのである。又、その隣室では、玩具のやうにごたごた山積みにしたさまざまの瀬戸物の素燒に、見る見るうちに、機械より素早く模様を描いてゐる

るのである。それが、髯も何にも生やしてゐない、『いろは』しか知らないやうな顔をした、小僧の大人見たいな男ばかりのだが、私たちが三ヶ月も掛つて、僅に習ひ得た蘭や竹や龜ぐらゐではなく、家でも、人間でも、虎でも、自由自在に、電氣のやうな早さで描くのである。案内してくれたその主人である私の中學同窓が、その中から一輪挿の花瓶を私たちに一つづつ撰り取つて渡してくれた、どうです、君方も何かいたづら書きをなすつて見ては？ 焼き上げてからお送りしますから、と云ふと、私が躊躇してゐたにも拘らず、八木は早速それを受取つて、係の人に繪具や筆を借りて、「これは青ですか、これは紅ですね、交ぜ合はして使つてもいいんでせう、」などと話だけは巧者かうしゃに運んでゐたが、いざやつて見ると可なり難かしい仕事らしく、「なるほど素人には駄目だな、熟練といふことが必要なんだな、」とひどく難儀してゐる様子なので、私は花瓶をそつと返して、なるべく無駄にしてもいいやうな湯呑茶碗を一箇貰ひ、九畝先生から習つた竹を『竹は直なり虎は剛なりと云ひましてな、竹は斯う下からすうツと筆を刎ね上げて、竹の力の這入つてゐるところは節です、だから節のところであらう、と力を入れて幾分か刎ね返し氣味にします、さうすると竹の心が現れます、』と云はれた教訓通りにやつて見ようとすると、筆は悪いし、繪具はねばねばだし、地はすべすべした畫箋紙などではなくて、さらさらの素焼陶器の上のこと

だから、『竹は直なり』と幾ら力んでも、筆の方で云ふ事を聞かないのだつた。密ひそかに得意にしてゐた竹がさうなんだから、私はそこそこ筆を擱いて、それから八木を促して、竈の場所に出かけたが、そこでは私たちは尙一層驚かされた。まるで地獄のやうな光景で、二人の素裸の人間が左右から、大きな鐵の棒のやうなものを持つて、かっかツと火の燃えてゐる竈の中を搔き廻してゐる。「何をしてゐるんだ？」と主人に聞くと、「火の加減を見てゐるんだ、」と主人は、餘所見をしなから、何事でもなささうに答へた。が、私は此處に來た時、初めて、ああ、僕にはこれはとても出来ない仕事だ、と斷念した。八木は、と見ると、彼も先程から阿米利加三界まで出かけて、こんな事を、やらねばならぬのか、と少なからず怖氣おそけづいてゐたには違ひないのだが、強情我慢の彼は、なアにと云ふやうな顔をして、體中からだぢゆうに汗がたらたら流れるのを感じながら、眞赤な顔をして、その竈の中を覗いて見たりなどしてゐる。さうして、「盛んなもんだね、」と少しも盛んでなさうな顔をして云つた。「なかなか盛んだね、」と私も力抜けした聲で答へた。――

さすがの八木も、その時以來、陶器のことは思ひ切つたらしかつた。紫山焼を見に行つた日から三月程後の或る晩、彼は私を訪ねて來て云つた。「結局、澤山のことを一時に研究しようといふのは間違つてゐる、我々は何と云つても繪かきだから」といつの間にか私を繪かきにしてしまつ

て、「先づ繪のことだけ計畫を立てようぢやないか？　そこで僕は思ふんだが、この休暇を利用して、どうだ、富士五湖廻りをしようぢやないか。それで富士山の繪をうんと描き溜めて、先づ阿米利加に行つたらそれを賣るんだ。それには、我々の日本畫の腕ではとても駄目だし、と云つて油繪もなんだから、結局、水彩畫が一番いいと思ふんだ、君はどう思ふ、水彩畫の方がいいだらう？　ぢや、明日あたりから行つて見ないか、二週間ほどの豫定で、ね、君？」

何といふ私は愚かな男であつたらう。尤も、かういふ告白をするまでもなく、讀者は、既に私が如何に意志の弱い氣の弱い人間であるかを見抜かれたことと思ふ。全く、その通りで、その一二ヶ月前に、私は八木と一緒に、旅行免狀の下附願ひまで出してゐたのだ。八木は相變らず阿米利加に出發する前の月に學校は止めるが、それ迄は何でも習つておくだけ得たと云つて、日曜日の外はせつせと通學してゐた。考へて見ると、彼は一日に何べん損とか得とか云ふことを口にしたことであらう？　が、彼に引きかへ、私は牛込の文科大學の方へは例の如く殆ど顔を出さなかつた。ところで、これまでの話で讀者にも大體想像が附いたかと思ふが、元もと、この渡米の件に就いては私はつい雷同的に賛成して、その後は八木の力に引きずられて次第に深間に這入つて行つたやうなものであるから、旅行免狀の下附を願ひ出た頃から次第に引込思案になつて來て、

本當に行くことになるのか知ら、と次第にそれに恐怖を感じるやうにさへなつた。終には旅行免狀が何とかして許可にならなければいいが、と祈るやうな氣にさへなつてゐた。

だが、その旅行にも、阿米利加で賣る繪を描く爲めに、水彩畫家になりすまし、私は富士山の繪を製造する旅に八木に連れられ、中央線の汽車に乗つて、大月驛で下り、そこから吉田に出て、河口湖、精進湖、本栖湖など順に廻つて、八木が六十何枚私が四十何枚といふ大量の水彩畫を描いた。彼は、朝起きると、私を促して、朝飯前に朝の富士を描きに出かけるのだつた。それから、午前うちに二三枚、午後二枚或ひは三枚、夕方の富士を一枚、といふ風にせつせと描くのである。私は徹頭徹尾彼に勵まされて描いたのであるが、生憎その頃は富士に雲ばかりかかつて、初めはそれが面白いと云つて描いてゐたが、河口湖でも精進湖でも雲のかかつた富士ばかりしか出来なかつたので、或る日、「君、そんなに雲ばかりのを描いちやいけない、もう雲のを止め給へ、」と八木が云つたが、「でも、現に雲ばかりかかつてゐるんだもの、」と私が云ふと、「そんな雲なんか取つてしまひ給へ、これ、こんな風に、」と見せてくれる彼の繪を真似て、私は實物の富士の景色を止めて、八木の繪を寫したりしたものである。

だが、私は、次第に、と云ふより、初めからの事ではあるが、それが次第にはつきり、八木の、格

言の紙切の下で呻つてゐる有様や、ぐんぐんやればいいのぢや！と憎體な口吻で拳を突き出す癖や、金と成功とに血眼になつて焦るやうな氣質などが、次第に感じが悪くなつて來ると共に、自分の輕率を、棚に上げて、彼から逃げ出したくなつて來たのであつた。精進湖から山中湖へ行く途中の富士の裾野を旅してゐた時、或る雨の降つた、どうしても外へ繪を描きに出られなかつた日、私が彼と並んで煤けた商人宿の窓にもたれて、瀧のやうに降つてゐる佗しい雨の景色をぼんやり眺めてゐると、ちやうど私たちのぼろ宿の二階の窓から、私の宿の前が原つ場になつてゐたので、半町と離れてゐないところに湖水が見えて、その邊に、誰の別荘だか分らないが、私たちの目には可なり宏壯な建物に見える、一軒の和洋折衷の別荘が見えた。奥さんらしい三十七八歳の、新派芝居に出て來るやうな、綺麗な婦人と、その人の娘か、或ひは妹かと思へるやうな、十七八歳の令嬢と、七歳ぐらゐの少年と、二十歳ぐらゐの書生體の青年とが、その當時、その家の住人であるらしかつた。晴れた日は、臙脂色のパラソルと、クリイム色のパラソルと、私たちの周圍では芝居でしか見ることが出來ないやうな、派手な美しい着物との持主が、その家の表に現はれるのだつた。さうして、夜になると、ピアノの音が、その明けの窓から聞えて來るのである。「あの女たちを一つ寫生しようぢやないか」と或る時私が云ふと、八木は言下に、ふふん、

と云つて黙殺してしまつた。が、彼女等の姿は彼の胸に私よりも一層深刻に彫りつけられた證據には、その雨の日の窓に私たちが向ひ合つてもたれてゐた時、私がぼんやり雨の筋を見てゐると、突然八木が、その別荘の方を睨みながら、

「君、この世の幸福は家庭にあるとは思はないか？」と云ふのである、「藝術はどうしてもその次ぎだよ。ね、立派な家、ピアノ、それから僕なら家の後の庭に花園を造るね、」「花園もいいね、」
「女には綺麗な着物が必要だよ、」「必要だね、」などと問答しながら、私は、ふと八木の頭は、あのへしやげたやうな顔の、雀の巢のやうな髪をした、不器量で、見るからに無教育さうな細君を、あの雨の中に烟つてゐる別荘の中に想像してゐるのではないか、といふやうに考へた。すると、私はひどく彼を輕蔑する氣になつて、「だけど、それには美人の細君が必要だね、」と云ふと、「それはさうだね。」と彼は同じ眞面目な顔付で云つた、「しかし、何にしても金だよ、金が最初のものだよ、」さう云つてゐる彼が、やつぱり、その心の中に、あの不器量な、無教育らしい顔の細君のことを、度外してゐないやうに私には思へた。と、私は又ひどく彼の氣性を有難いものと尊敬されて來るのであつた。――

ところが、その旅行から歸つてから、私の彼から逃げ出した氣持が急に強くなつて來た。そ

れは、彼から逃げ出したいと云ふよりも、亞米利加行きから、逃げ出したくなつたと云ふ方が切實であらう。その時分から、私はときどき少しづつ彼に弱音を吐き出した。すると、眞面目になると、ますます皺枯れた、掠すれ聲になる聲で彼が云ふには、「君、男といふものはどんな事があつても弱音を吐くものではないよ、今の人間には殊にこの弱音を吐く者がだんだん多くなつて來た。僕はその點では昔の武士の意氣地といふものを學びたいと思つてゐるよ。今の人間は一寸した病氣に罹つても、それを十層倍にして表現する。僕はあれが大嫌ひだ。その點では僕は自分の親父を自慢するぢやないが、僕の親父は決して苦痛といふものを人に訴へたことがなかつた。或る時、ひどい下痢病、今のコレラ見たいなものだね、それに罹つた時、迷信だか何だか知らないが、八ツ手の葉を入れた湯の中に腰を浸けて直す法をとつたと思ひ給へ、鹽の中になるべく熱いその八ツ手の葉の湯を入れて、僕の親父はその中に腰を浸けたんだ。見る見るうちに彼の額からだくだく汗が出て來て、彼がじつと兩手を握りしめて辛抱してゐる様を、傍で見てゐる者が辛くなつた位ださうだが、なアに少し我慢する位でないと汗が出ない、汗が出ないと直らない、と彼は云つて、お蔭で病氣は直つたさうだが、下痢病の方が癒つてからも、腰から下の湯に浸けた部分がつかり爛れてしまつて、それを直す方が長くかかつた位ださうだ、そして君、その時あん

まり我慢して手を強く握つたので、兩手の指の爪が十本とも、みんな脱けて掌にささつてゐたさうだ。この親父だよ、僕の家は土佐の藩士だつたからね、例の堺事件で毛唐を殺した謝罪にみんな腹を切らせられた事があるだらう、僕の親父はあの時切腹して死んだ一人だ……。」

こんな風に云はれると、私は又彼の何か妙な力について引きずられるのだつた。さういふ時の或る日、「どうも、やつぱりさう物事は理想的にばかり行かないものだ。それで、いろいろ考へて見たが、スクウルポオイの方法も一通りは覚えておく方がどうも便利らしい。小石川に去年あたりから出來てゐるね、苦學力行會といふのがあるだらう、あそこの渡米部といふ所へ行くと、三ヶ月で修業できるんださうだから、君、あそこへ行つて置かう。決して損はないだらうと思ふ。それに、その方が萬全の策だから、」と八木にかう云ひ出された時は、さすがに私も實に閉口してしまつて、「さうだね、」「さうだね、」などと二三度生返辭をしたのだつたが、結局、彼の例の力に引きずられて、その苦學力行會の渡米部に入會したことがあつた。

その學生は私の牛込の文科の同級生よりも更に一層劣等なものであつた。二人の百姓の青年を除いて、併しその二人も、變に頭の毛を石川五右衛門のやうに延ばして、わざと銀縁の眼鏡などをかけた、正體の知れない風體の者共だつたが、他の七八人は、それより一層ひどくて、職工

なのか、職人なのか、或ひは商人なのか、もういづれも、下駄に譬へると、磨り減つてしまつて、その元が何であつたと想像のつく者は一人もゐなかつた程であつた。その時、八木はたうとう美術學校の特待生を辭して、もう渡米の期が迫つたからと云ふので、その方を専門にしたので、毎日私を誘ひに来て、仕方がないので、私も毎日出かけて行くのだが、實際、その空氣は、私の嫌ひな八木の性格の中の一分を十倍にした位のものであつた。さうして教へる課目といふのは、皿洗ひ、西洋料理の造り方、農園の仕事、日常會話、渡米生活、などといふ諸課目に分れてゐるのだが、私は到頭そこに一週間通ふうちに、はつきりと心の中で渡米を斷念する事に決心したのであつた。だが、それを八木にどういふ風に打明けたものかと思案しながら、ちやうど力行會の方へ一週間程通つた後の或る日、彼の下宿が、といふよりも彼の家が、彼の細君とその母親との意見で、小石川の方に非常に家賃の安い家が見付かつたといふので、越して行くことになつたのであつた。そこで、私は彼が越して行つた翌日、たうとう手紙で、いろいろ口實の文句を並べて渡米を斷念する理由を書いてやつた、それと共に力行會の方も止めて、當分、國の方に、三週間ばかり歸つて來る、と書いたのである。

だが、八木は、私のその裏切りと共に、ますます反撥的に、彼だつて屹度力行會の空氣には少なからず閉口してゐたのには違ひないのだが、彼一流の辛抱氣を以て、通ひつづけたのに違ひなかつた。さうして彼はそれから四ヶ月目に愈よ渡米の旅に立つといふ知らせを私に遣たくしたのであつた。尤も、その間に私たちは一二度會つたが、いふまでもなく以前のやうに話がはずまなかつた。その時に私は氣がついたのであるが、彼の細君は七ヶ月ぐらゐの腹を抱えてゐるやうだつた。横濱から立つて行く彼を見送つたのは、彼女と、彼の唯一の身内である姉（この人が月々僅ながらの仕送りをしてゐたのであつた、彼女は土木請負師の妻であつた）と、彼の友達の美術學生（私は彼と附合ふやうになつてから、知つたのであるが、彼には私の外に殆ど友達がないことであつた、その唯一の友達で、私も彼を通して二三度會つたことのある逸身といふ青年）と、さうして私との四人であつた。

彼は無論三等船客であつた、それに、どうしてそんな船を選んだのか、或ひは知らずにそんなのに乗合はしたのか、彼の乗つて行く船といふのは、これが阿米利加まで行くのか、と見送り人一同は、黙つてはゐたが、内心暗い氣がした程、小さい、而もするぶん年寄つた船らしいのであつた。それも未だいいとして、どういふ都合だつたのか、變な青い、砲兵工廠の職工に見るやうな色の洋服とも仕事服ともつかぬ着物を着た百人以上の支那人の勞働者らしいのがその船の主な

る乗客らしいことであつた。私はよく知らないが、屹度その船は上海とか香港とかいふ支那の港を廻つて来て、さういふ渡米の支那人たちをもう澤山乗せて来たのに違ひないのだ。彼等が蠅のやうにうようよしてゐる中を、青白い顔をした美男の八木彌次郎が歩いてゐると、彼の柳原で買った洋服さへ輝くやうな異彩を放つて見えたので、「八木君は實に立派ですね、堂々としてゐますね、」などと私が、内心は初めに彼と行動を共にすることを約束しておきながら、それを裏切つて、今日斯ういふ貧しい船で、みじめな人々と一緒に彼一人を送るといふことが何となく気が咎めてならぬので、半分はお世辭もあつたが、半分は心からさう思つて彼の姉や細君に云つたが、彼女等は一様に、つと泣き顔のやうな笑ひ顔を返しただけであつた。全く、彼女等がその時見せた、つと泣き顔のやうな笑ひ顔の表情は、その時の光景を最もよく表象するものであつた。何も知らない者が聞いても、確に英語でない、妙にいらいらした發音の支那の言葉で、それも無論教養のない労働者たちの饒舌に違ひないのだから、何とも云へぬ騒々しい、私たちが聞いてゐると、何も云へぬ佗しさうな騒々しい轉りの中に、わが八木彌次郎が甲板の欄干に無言で立つて、そのうちにガンガンといふ發船の合圖の鐘が鳴り、ガランガランと錨が巻き上げる音がして、さうして煙突から出る煙が次第に太くなつて来る、甲板の支那人たちの青服が火事場のやうに動揺する、そ

の中に八木彌次郎は同じ所に動かずに立つてゐるのであつた。併しいよいよ船が動き出した時は彼は半巾を振つた。すると、送りに行つた岸の女たちはいふまでもなく、逸身も私も目頭が暑くなるのを感じながら、半巾や帽子を氣違ひのやうに振つたのであつた。——
さうして彼が阿米利加に行つてからも十年立つたのであつた。——行つた當座はときどき彼からの消息を私は受取つた。彼の手紙にはいつの時でも、別に私たちを喜ばせるやうな珍事は何も書いてなかつた。唯ぐんぐんやつてゐる、今は一介のスクウルボイイだが、當初の志は死んでも貫徹しなければ止まない、來年は何とかして佛蘭西に行きたい、金の爲めの労働はしてゐるが、決して繪を描く事は怠つてゐない、といふやうな文句ばかりであつた。が、次第にさういふ通信さへも絶えてしまつた。却説二年程後のことであつた、私は、或る日、偶然小石川の八木の細君の家の前を通つたので、寄つて見た。さうして、彼からの消息の有無を聞くと、此頃はちつとも、と彼女は吐き出すやうな素氣ない挨拶で答へた。さうですか、さよなら、と云つて、私は外に出たが、その後逸身に會つたとき聞いた話などを参照すると、彼女は彼が渡米してから、留守の部屋に下宿した男とどうかしてゐる、といふやうな話であつた。八木の子なんかどこかへやつてしまつたらう尤も、あれだつて、八木の子だか何だか知れたもんぢやないからね、と

逸身は云つた。まさか、それに失敬だが、あんな不器量な人だものと、私が云ふと、だけど、女だ。からね、と彼は冷笑するやうに云つた。さうして彼がつづけて云ふところに依ると、八木が阿米利加から始終手紙を遣^{よこ}して、今に出世して歸るとか、自分が斯うして、遠い國で苦勞してゐるのも、皆お前たちの爲めだ、などと、實際彼のことだから、そのつもりでさう書いて來るんだらうが、彼女はそれに對して一度も返事をやらなかつたさうだ。俺も相當の金が出来るまで幾年でも辛抱して働くから、辛いだらうが、お前も屹度待つてゐてくれ、と彼から云つて來るのを、馬鹿馬鹿しい、そんな夢見たいな話を聞いてゐられるものか、此方^{こつち}だつて生きてゐるんだもの、と彼女は云つたさうだ。併し、日本の足の裏に當ると云ふ陀米利加で、八木は相變らず國の出來事など何も知らずに、例の如く棒のやうに固く腕を組んで凄^こい目付で阿米利加の空を睨んでゐたであらう。——

彼が、最後に、私にふらりと思ひ出したやうに手紙をくれたのは、今から五年程前のことで、——その頃、私が下宿してゐた、あの私の遠縁の批評家は、私が懶けてたうとう免狀を貰はなかつたところの、牛込の文科大学の教授に出世してゐて、私がその男と一緒に或る夏房州へ旅行した時、その男のお蔭で、或る新聞の文藝消息欄に私の名前も彼と一緒に、目下房州に旅行中、と六號で載つたことがあつた、それがどうして廻つたものか、多分何かの小包の小包の紙にでもなつ

て行つたのを、阿米利加で八木が見出したものと見えて、それを彼は私がひどく出世したものと認めたらしいのだ、で、遣^{よこ}した手紙の中に、君たちの活動を遙かに祝福す、併し、僕も決してこのまま阿米利加に朽ちる者ではない、來年は佛蘭西に渡るつもりだ、といふやうな事を書いて來た。さうして彼との交渉はそれ切りになつたのであつた。——

ところが、つい先達て、私は上野の展覽會の會場で數年ぶり、去年あたりから急に有名になつた畫家逸身に會つて、二人で會場の中の喫茶店に這入つて、いろいろの話をした時、その話の最初に、私は彼から八木彌次郎が死んだことを聞いたのである。——

八木彌次郎はたうとう佛蘭西の土を踏まずに、去年の秋病氣になつて、阿米利加から歸つて來たのであつた。彼女の姉が唯一人横濱まで迎へに行つたのであつた。彼は大きなスウツケイスを兩手に提げて、反り身になつて大跨で棧橋を歩いて來た。體^{からだ}が悪いなんて、どうしたんだらう、あんなに丈夫さうな癖に、と思ひながら、しかし姉は彼が傍に來た時、恐ろしく顔色の悪いのに驚いた。不斷からいい色ではなかつたが、その時は全く土の色をしてゐたといふことだつた。お前、大變顔色が悪いぢやないか？ と彼女が云ふと、なアに、船の疲れでせう、と彼は元氣な聲で云つた。それから、姉と一緒に汽車で東京に歸つたのであるが、新橋に着いた時、彼女が、兎

に角、彼女の家まで一緒に歸らうと云ふと、兎に角、僕はこれから直ぐに大學病院に行つて來ますその爲めにわざわざ阿米利加から歸つて來たんですから、と彼は云ふ。が、姉が、二三度も、一應家に歸つてからと進めたが、相變らずの彼の強情さで、彼は、姉に一足先きに歸つてもらつて、さうして彼一人で大學病院へ行つた。ところが、その翌日彼が歸つて來ないので、彼女が大學病院を訪ねて行くと、彼は、白い寢床の上に、瀕死の病人として横たはつてゐたのであつた。彼女が醫者に病人の容態を聞くと、醫者は、八木がこれだけの病氣を抱いて死なずに阿米利加から歸つて來たこと、棧橋を大きなスウツケイスを兩手に提げて歩いて來たこと、一人で新橋から病院まで來たことを信じない程であつた。さうして、更に醫者を驚かしたのは、病人は、醫者がしばしば死を宣告した、その翌日も、その又翌日も、生きてゐたことであつた。

さうして、彼が入院してから一週間目のことであつた。彼は一人一室の特別室の患者であつたが、一寸の間、ちやうど附添ひの、彼の姉も、看護婦もゐない間のことであつた。彼は、寢床の上に坐り直つて、阿米利加で買つて來た大形のナイフを自分の腹に突き立てたのであつた。突き立てて、その上をシイツで巻いて、目を瞑つて端然と坐つてゐるところへ、彼の姉と看護婦とが這入つて來たのである。彼女等は病人が寢床の上に坐つてゐるのに驚いた。

「どうなすつたの?」

「どうしたの?」

かう叫んで、彼女等は、寢床の傍に行つた時、彼の顔色が、土色、といふよりも、唯ならぬ色に變つてゐるのを發見した。

「先生を、先生を!」と姉が叫んだ。

看護婦が部室から飛出した。

「まあ! 彌次郎、彌次郎!」と、姉が彼の寢臺の欄干に片手をかけて、つづけさまに叫ぶと、彼は、大きな目に、見えない光を湛へて、その目を一寸の間明いてゐたが、やがて、瞑つた。さうして、殆ど聞きとれぬ聲で叫んだ。その時、看護婦と醫者とが部室に這入つて來た。

「枕を、枕を……枕を!」と彼は『阿米利加語』で云つた。

姉は大急ぎで横の方へ轉がつてゐた枕を直した。と、その注文した『枕』の上に、彼は、仰向けにパタンと、操人形のやうに、倒れた。さうして、頭はうまく枕の上に乗つた。かうして八木彌次郎は、思ひもかけない、神の國へと旅立つたのであつた。

四
人
ぐ
ら
し

それは全く一ト月のうちで幾度と數へる程でしかないが、私は稀に私の家の人たちと一つの食卓をかこんで箸をとることがある。といふのは、私は、いつも自分の不規則な生活のために彼等と食事する時間が一致しなかつたり、また私の殆ど不斷のヒステリ的な不機嫌な氣持が彼等の氣持に傳染することを恐れるの餘り、大抵の時は自分の居間と極めてゐる二階の四疊半に食膳を運ばして食べることが多いからである。私の家の人たちといつても、それは、私と、私の母と、私の妻と、十六歳になる私の従兄弟の中學生と、たつた四人きりなのであるが、私たちは滅多に食事にそろつて顔を合すことがないのである。おお、何といふ古風な、世紀末的な、飯櫃いびつな氣質の主人を持つた一家の不幸よ！ だから、却つて適まよに私が彼等の食事の仲間入りをすることは、彼等に一種の氣づまりを與へるために、殊更に私がそんな風に感じるのであらうか？ 箸を下ろす音、茶碗を運ぶ音、物を噛む音、吸ふ音、その間にまじつて、時々ごく僅か「今日は寒い、」とか、「曇つてゐるので部屋の中が暗い、」とか、「日曜だから公園の動物園は賑つてゐるだらう、」とかいふ程の言葉のやりとりだけで、徹頭徹尾靜かではあるが何となく陰氣で重苦しい。——私は尋常小學校の初年生であつた頃、田舎の親類に行つて、蠶の部屋に這入つた時、澤山の蠶がぶちぶ

ちむちむちと音さして、元より蟲のことであるから何の話をしやうもないが、青い桑の葉の間に
 縫もれてそれを食つてゐたのを見た光景を、何ともいへず子供心に不思議とも神秘とも感じられて、
 未いまだに時々思出すことがあるが、私は、私たち四人がだまり勝に食卓に着いてゐる時屢々それを思
 出すのである。それは彼等を輕蔑して蟲のやうに考へるといふのではなく、むしろその反對で、
 不斷は私自身の考や氣分に浸り過ぎてゐるために、それこそ彼等の存在を忘れることがあるかも知
 れないが、私が彼等をこの蠶と共に思出す時はもつとも彼等の存在を痛感する時なのである。
 不斷は、彼等も亦蠶のやうに、單に人の母とか、人の妻とかいふ普通名詞に過ぎないやうにしか
 私の注意を引かないのであるが、この時に限つて、彼等も亦それぞれ置き換へられない個性をも
 つて生きてゐることが、私に痛感されるのである。

私といへば、私はまるで一人の居候のやうに、その居候も唯の居候ではなく、何かイブセンあ
 たり近代劇に出て來る不思議な象徴的な役割をする人物でもあるかのやうに、二階の片方の
 私のもとの極めてある四疊半の部屋に閉ぢこもつたきりで、それと隣の部屋との境の唐紙さへ決
 して私のほかの者の手で明け締めすることを許さなかつた。だから、季節が夏に向つて、その唐
 紙を簾に變へなければならなくなると、私は忽ち巢を人に見つけられた獸のやうに又別の隠れ家

を探さねばならなかつた。が、元もと小さな借家住居をしてゐる身分のものであるから、私は毎
 年の夏を自分の家の近くでなるべく目立たぬところに貸間を探して、その季節の間だけ借りるの
 が一昨年からの例になつてゐるくらゐである。だから、私の家の人たちは冬の間の私の部屋を緯
 名して『明かすの部屋』などと呼んでゐた。彼等は、多分、その部屋の中で私が一所懸命に私の
 仕事であるところの文章を書いてゐるか、それとも彼等には何が書いてあるか一向分らない蟹文
 字の本にでも読み耽つてゐるかと思像して、敬遠してゐるに違ひないのである。それも大方間違
 ひでないので、なる程、私はその部屋の中でさういふ時間も暮してゐるのである、だが恐らく費
 す時間の三倍も私はそこで何にもしないで、唯ぼんやり、肘机をついたり、寝轉んで天井を見た
 りして暮してゐることを彼等は知つてゐるであらうか。

私の妻は四年前まで信州の下——町で藝妓をしてゐたものであつた。よく彼女のやうな職業の
 者が客の座敷に來ていふことに、「私は堅氣になつたら朝は早く起きて旦那様の起きないうちに身
 仕舞をして、旦那様の起きる時分には火鉢に火をおこして、お茶をいつでも入れられるやうにし
 て、そしてお裁縫を勉強して、旦那様の代筆ぐらゐは出来るやうに字も稽古して、お料理も一所懸
 命に習つて、晝間日本食を上げたら夕方は洋食を出すといふ風に、そして旦那様のお出かけの時

とお歸りになる時とは玄關に手を突いて挨拶する、とそんな風にするの、「云々。が、若し彼女等がさういふ運命に廻り逢つたとしても、恐らく、その百人のうちの一人もがその言葉通りにしないばかりか、多分ことごとくその反對を振舞つて再び元の身分に戻るのが普通であらう。

私の妻を私が初めて見たのは、——下町の劇場で催された温習會の舞臺の上でだつた。舞臺の眞中で二人の若い踊り手が曾我兄弟を踊つてゐる背景に、彼女は赤い毛氈を敷いた壇の一番左の端に坐つて、『富士の裾野』を三味線を弾きながら歌つてゐた。——それはたつた四年前のことであるが、今、私はその時のことを強ひて思出さうとしても殆ど出来ない程である。それほど彼女は變つてしまつて、彼女こそ、朝は夫の起きない内に身仕舞をし、裁縫も勉強し、習字も稽古し、料理の法もせつせと習ひ、さて夫の送り迎ひには玄關に出て手を突いて挨拶することも忘れないのである。三味線は私の部屋に置いてあつたが、彼女はそれを弾いたことはなかつた。たつた一度、珍しく私の機嫌の輕かつた或る晩、私が彼女に何かをやつて見ないかと云つたことがあつたが、彼女は、昔のことを思出しか思出さなかつたか、私よく出来ないんですもの、と云つて、たうとう應じなかつたことがある。

その同じ四年前のこと、私は同じ下——町の一人の藝妓に心をとられた。いふまでもなく、そ

れは今の私の妻ではないので、その藝妓といふのは當時一歳の子を持つて、私が初めてその町へ旅の鞆を下ろした時、彼女は偶然二度目の披露目をしたばかりの時であつた。私は少年の頃伯父の家に世話になつて、そこから中學校へ行つてゐたのであるが、或る日、叔父の妻、即ち義理の伯母が、どういふ折であつたか、「私の親愛なる甥よ、」西洋風で云ふと、彼女がこんな風な調子で、「私のやうな無學の者のいふこと、何を愚かなことをいふと思ひになるだらうが、また實際私たちのいふことに自信を持つて云へるやうなことは何一つないが、唯一つ……」——さうだ、その時、私は中學四年生時分であつたが、何か女の事で人々に心配されたことがあつて、その事を暗に伯母が諭すつもりでこの話をしたに違ひなかつた、——彼女が云つたのである。「……唯一つ、親愛なる甥よ、人間といふものは、男でも、女でも、自分が、この人こそ好きと思つた人と、一緒になるといふことは、そんな事はこの世にはないことなのです。自分の本當に心から好きと思つた人と連れ添ふといふことは、それは出来ないものなのです。」

「伯母さん、それはどうしてですか？」と少年の私は聞いた。

「どうしてつて、それは私にも分りません、分る筈がありません、」と彼女は云ふのである。さうして彼女がつづけた言葉を、便宜上西洋流にいひ直すと、「それはつまり神様の思召しなんです、

我々がこれが一番都合がいいと考へたことでも、我々をお造りになつた神様の目から見るとさうでないことがある。神様は、もつと廣いところから、もつと高いところから、この人間の世界を知食してゐらしやるのに違ひないので、即ち今云つたこの世で最も好きな同士は戀仲になることはあつても、夫婦になるといふことは多分神様のお許しにならないことなのでせう。併し、今、私がこんなに云つても、私の親受なる甥よ、あなたは、若しかすると、心で嗤つてゐるかも知れない。ですけど、これから十年たち二十年たちした後、あなたは昔のことを考へて、私の云つた外の事は、すつかり、忘れてたり思ひ出したりしても、あの馬鹿な無學な伯母が、と大抵のことは笑ひの種になることばかりであらうが、この事だけは、唯一つの取得だと思當ることが屹度たびたびありますよ。あんな愚かな伯母ではあつたが、なるほど、あの人が云つた通り、これだけは本當だつたなと思ひ當ることが必ず度々ありますよ、私の親愛なる甥よ。」

これは恐らく伯母その人の經驗からであつたらう。が、これがその後しばしば私の經驗となつて、彼女が云つた通り、その度毎に彼女の言葉を私に思ひ當らした。思ふに、この言葉は、私のやうな浪漫家に眞理であるやうに、現實家にとつてもさうであるに違ひない、何故なら、それは俗に『逃がした魚は大きい』といふ諺の別の云ひ方かも知れないからである。けれども、私は、さ

う思はず、又思ひたくない。却説その私が愛したところの山の子持藝妓であるが、私は、彼女にたうとう私の心持を打明ける暇がないうちに、彼女の朋輩である、今の私の妻と輕率な夫婦の交りを結んでしまつたのである。さうはいふものの、今も述べた通り、私は彼女にたうとう私の心持を打明けなかつたのであるから、彼女に裏切つたことを彼女に辯解する必要もなかつた譯であるが、併しよしそんな事をする必要があるとしても、そんな事は詫びるにしても嘘をつくにしても、指して難かしい事ではないが、難かしいのは自分の心に嘘をつき、自分の心をごまかす事である。おお、彼女はどんなに自分の思つてゐる事を口に出さない、しぜん、人の蔭口をきかず、自分自身を吹聴せず、晝にかいたキリストのやうに物事を堪へ忍んで物いはない性質のものであつたか、そのことは私はこの三四年來幾度となく私の文章の中で讚辭をもつて書いたが、私は今の私の妻と夫婦の生活をしてからも、一日として彼女のことを忘れたことがないのである。さうして、彼女を思ふことは、初は私に苦しみであつたが、今は私にこの味氣ない世の中での、唯一の空想であり、詩であり、光である。世の人々よ、晴れの文章の上でかういふ空けた話をする私を笑ひなすな。さうして、今、私は又嘗ての伯母の言葉を思ひ出すのである。——如何にも人間を造つた神の心は廣大無邊で、私に失はれた彼女は恐らく失はれたが故に、私の光となつた、と私

は感謝するのである。

そこで、私は、その後も一年に一度か二度づつ私の妻に隠れて、彼女のゐる下——町に行く事を樂みにしてゐたのである。行つたとて、私は唯の客として、彼女は唯それに呼ばれる藝妓として、私たちは會つて、彼女も物いはず私も物いはずの性質であつたから、何の面白い話をするといふこともなく、ぼつりぼつりと四方山の話を交すだけで、行き交ふ人のやうに會うて別れて歸つて來るのであつたが、さて一昨年の春のことに、ふと私は或る人から彼女が二度目の子を腹に持つたといふ知らせを受取つた、私はそれを又他の人からも聞いた、私は取るものも取敢ず彼女を見に山の町へ出かけて行かうと思つたが、さて、彼女がそんな體になつたとて、私自身で驚きもし悲しみもするが、それは私に何の責められる權利もないやうに、彼女の方でもそれを私に特に濟まなと思ふ譯もないのであるが、併し何れにしても私はそんな體になつてゐる彼女を見に行くのが悪いやうな氣がした、さうして彼女も亦恐らく、私には、外のどの客によっても、そんな體を見られることを嫌に思ふに違ひないと考へられた。それは私の單に自惚れであるばかりでなく、先きに述べたやうに、小説を書くことを仕事にしてゐる私は、彼女を見て以來、彼女の藝名のさよ子といふのに稍々響を似通はしたつもりで、さうして私の夢であるといふつもりで、ゆ

め子といふ名前をもつて、一ダズンに近い小説を發表したが、その中で私は初めて彼女に對する私の心持をたとひその十分の一でも書き書きしたのである、而もそれまで、度數にすれば何十度となく彼女に面と向つて會ひながら、一度もそんな言葉を口にしたことはなかつたのである、だが、口では云はなくても、それが相手に感じられない筈はなかつたが、それでもそれ等の文章はその後の心持を具體的に表すに役立つたことは確かであらう、兎に角、さういふ不思議な關係に私たちはあつたのだつた。しかし今度その二度目の子を生むために彼女が商賣を止めてしまつたら、次ぎに又いつ會へるか、或ひはもう會ふ機會を持つことが出來ないかも知れない、……私はさういふ心の状態で迷ひ迷ひしてゐるうちに、いつかその年を暮してしまつた、さうしたら、その年の暮に彼女が商賣を止めたといふ知らせを私は受取つたのである。併し又、去年の春、私はもう出かけて行つても彼女に會ふことの出來ないその町に、何かの影を求めらるやうなつもりで、二三日滞在に出かけたことがあつた。

私はその下——町の、四年この方行きつた宿屋の一室に坐つて、或る晩のこと、つれづれなままに彼女の朋輩でもあり、又多少私たちの關係を知つてゐる藝妓の一人を呼んだところ、その部屋に卓上電話があつて、それが外線に連接するやうになつてゐた、朋輩藝妓は、その卓上の電

話の受話器を手に取つた、瞬間、私は彼女が何處へそれを掛けるかを直覺した。

「もしもし局へつないで下さい、」と彼女は云つた。果して彼女が局を通して掛けた先きはさよ子の家であつた、「もしもし、梅廼家さん？……さよ子さんゐらつしやいますか？ ああ、あなた、さよ子さん……」

先程から少しづつ動悸し出してゐた私の心臓はたちまち震へ出さねばならなかつた。

「あなた、さよちゃん？」彼女がもう一度念を押した時、私はバネ仕掛のやうの手を上げて、「ちよつと、ちよつと、」と震へを帯びた囁き聲で叫んだ、が、既に彼女は話しかけてゐた。

「あたしよ、くれ葉よ、」と彼女がいふ、「あたし、今、龜屋に來てるの、あの三階のお座敷に……分つて？……」

「ちよつと、ちよつと、」私は通話口のところを手で抑へながら、「あの、あの、僕が來てるつてこと、云はないでくれ、……」

「さう……？」くれ葉はその善良さうな目で私の方を見て云つた、さうしてちよつとの間だまつてゐたが、やがて私が手を離れた電話口に向つて言葉をつづけた、「體はどう？ もう外へ出られない？……今、あたし？……珍しい方がゐらしつてるのよ、ええ、珍しい方……分つて？ 分

つて？ 分らない？」だが、先方のさよ子は、その龜屋といふ名と、三階のお座敷といふ事と、それに、くれ葉の口振りと氣色とで、その珍しい方が誰であるかを察したに違ひなかつた、而もそれを分らないと答へたに違ひなかつた。くれ葉はその先方の返事と今し方の私の言葉との爲めにちよつと混乱して見えたが、やがて云つた、「さう、……ぢやあ、あたし、歸りにちよつと寄るわ、そして、お話するわ、ぢやあ、さやうなら……」

さうして、その翌日、私は下——町を立つたのである。それから、ちやうど一年たつた二月初め頃、下——町から東京へ來てゐる友人から突然手紙があつて、故郷からの消息にさよ子さんが今度上——町の方から、そこに矢張り彼女の家が出てゐる藝者家があるので、そこから出たさうです、と知らして來た。そこで、私が上——町にゐる知人にそれに就いての問合せの手紙を出す、それが先方にとどかぬ先きに、行き違ひに、その上——町の知人からも同じ知らせがあつて、さよ子さんが一週間程前にこの土地で出ました。元のさよ子でなく、あなたがこれ迄たびたび小説の中でお使いになつたゆめ子といふ名をそのまま、とあつた。と又その二三日後に、先の東京の人から彼の郷里の新聞を切抜いたのを封入した手紙が來た。その切抜には『下——町のさよ子が今度當地でゆめ次と名乗つて出た、』云々といふ記事が出てゐた、さうして手紙の中に、

「ゆめ次とは、多分あなたの小説の中のゆめ子のゆめと、それからその作者であるあなたの清次の次とを合はしたものでないでせうか、これは私の想像ですが、取敢ず……」云々と認めてあつた。が、これは『ゆめ子』の方が本當であつた。さうして、彼女が名を改めて出た事は本當らしかつた、といふのはその手紙と前後して、彼女が今度出た土地であるところの上——町の、前に私が見たのとは別の新聞社から、どういふつもりか、矢張り彼女の新しい消息の出てる新聞を私のところへ送つて来た、それにも『ゆめ子』とあつたからである。——

又しても私は自分自身に就いて餘り多く語り過ぎる悪習慣を讀者の前に曝け出したが、説話の關係上もう少し讀君の寛恕を乞うてそれを續けると、話變つて、その半月程前であつたが、私は、世話してくれる者があつて銀座に近い或る路地の中にある仕事師の家の一階の部屋を借りる事になつたのである。この部屋は併し私に最も氣に入つたものといふ譯には行かなかつたが、やがて追々と温い季節が来るならば、先きにも述べたごとく私の家の四疊半の部屋が、その隣室との境の唐紙を明けなければならなくなるので、全くの私のものになり切る譯に行かなくなる、その準備として、少し早過ぎはするが、と思つて、その氣になつたのである。電車を數寄屋橋で下りて、とある横町を一町ばかり行つたところの左側に、小綺麗な路地があつて、その中は右側は誰のど

ういふ家だか監獄の塀のやうな高い板塀になつてゐた。さうして左側に仕舞家が二軒あつたが、その取附の方が、私とその二階を借りることになつた仕事師の家で、見たところ路地は行きづまりのやうに見えてゐたが、實はその突當りまで行つて見ると、鍵の手になつて、それが向ふの横町まで突き抜けてゐた、その曲り角を境にして、私たち、即ち仕事師の家を含む側が極めて閑靜であるのに引きかへて、他の路地は、中に小さなおでんやがあつたり、大きな料理屋の勝手口があつたり、唄の師匠の家があつたりする、陽氣な騒々しい一劃をなしてゐた。さうしてこれは私に氣に入らない場所ではなかつた。去年、私がこれと同じやうな意味で二ヶ月餘り借りてゐた部屋は私の家の近くの東臺館といふ貸間専門に建てられた半洋風の建物で、それは私の家から近かつたのと、扉の鍵を中から掛けさへすれば外から絶対に闖入される恐れがなかつたのと、その上にそれは私が全く誰にも話さずに全然秘密で借り入れたのとで、私はその部屋の中でならば贗札を拵へることも出来るくらゐであつた。が、それから思ふと、今度のは六疊と三疊の二間あるのは便利だつたが、抑もそれを私に世話してくれたものがその家を知つてゐた。といふのは、それは私がいつとなしに馴染んだ或る山手町の三流藝妓で、彼女はその町で母親と二人で二三人の抱妓を置いて自前で働いてゐるものであつた。さうしてその母親の情夫で、殆ど一月の大半を彼女等の

家に來て暮してゐる男といふのが仕事師で、私が今度その二階を借りることになつた家は、彼の友達の同じ仕事師の家なのであつた。彼女は私にしばしば自分の家に遊びに來いと進めた、母親といふのも養母で、彼女の情夫の彼女等の家に入り浸つてゐる仕事師といふものも謂はば彼女の居候で、つまりその一家を經濟上に支へてゐるのは藝妓の彼女自身なのであるから、その家に遊びに來るのに何の遠慮も入らぬではないかと彼女は云ふのである。いふまでもなく、この女は三流町の三流藝者に違ひなかつたが、私は又私のをんなを褒めるではないが、器量は二の次ぎである代りに不斷は至つて口數の少ない、下品な稼ぎをしたものであるに拘らず、何方かといふと心持は大様とさへ云へる性質を持つてゐた。だが、神よ、彼女は酒好きでヒステリーであつた。彼女が私に自分の家へ遊びに來いといふことを切出すのに恐らく三ヶ月もかかつたに違ひない。或る時はちよつと云ひ出しては止め、又他の時は冗談のやうにいづつて顔を赤くし、又別の時は彼女の無智な頭の智恵のありきりを働かして暗示する云ひ方で、併し要するに彼女は私を彼女の情夫に見立てたのに違ひないのである。母親の情夫は仕事師か、さうして娘の情夫は小説家か。——人々よ、嘲りなすな、私は諸君に嘲られる前に、私自身さうならないうちから、何度私を嘲り、人知れぬ暗がりでも赤面し、腋の下に汗したか知れない。だが、私のやうな、物を斷れない性質をも

つてしても、到頭それだけは實行する氣になれなかつた。すると、私が夏になると、私が家の外に勉強するための部屋を探してゐるといふ話を彼女は覚えてゐて、今度その銀座に近い下町の仕事師の家の二階を私に世話しようと云ひ出したのであつた。それを私は斷り切れなかつたのである。格子戸を明けて這入ると、色色な火消の道具が置いてある、一坪ばかりのタタキになつてゐたが、都合のいいのはその玄關が階下のためよりも二階のために作られたかと思はれる程、取附きに、眞正面に二階への梯子段が附いてゐたので、適にその右手の若衆の部屋になつてゐるところ、障子に簾められた硝子の間からちらと姿を見られる外は、外の人と顔を合すことなしに二階の部屋に上ることが出來た。去年の東臺館の時には、これも矢張り家に秘密にしてゐたので、机とか本箱とか座蒲團とか、さういふ日常の道具を集めるのに並々ならぬ骨折だつたのに比べて、それは一月の末の或る寒い風の吹く晩であつたが、私は女に連れられて初めてその部屋を訪問した時、私は、この女とこれ迄しばしば會つてゐた何處かの待合の一室か、否、それよりもつと近いのは矢張り藝者屋の藝者の居間かと思はれた程、そこには新しい長火鉢、茶籠筒、紫檀の机、縮緬の大型の座蒲團、衣桁、それから、これは階下の仕事師の家のを借りたのであらうか、古びた二枚折の屏風、その他炭箱、火箸、茶瓶、花瓶、茶道具、拭巾、ことごとく新し道具類が、私た

ちを歓迎するやうに明るい電燈の下に輝いてゐた。茶棚の棚の上には、これも新しい硝子箱入りの『仲の町』と染めた半纏を着た人形や、それは多分彼女の家から持つて来たものであらうが、友禪の着物をだらりと着せられた三尺位の人形やが飾られてあつた。だから、私はそこに去年のやうに自分で苦心して道具を集める必要を見出さなかつた代りに、それは一見して私の部屋ではなくて彼女の部屋であつた。私は甚だ迷惑しなければならなかつた。その時初めて気がついたのであるが、長火鉢の向ふ側に坐つて、「明日箆筒を一棹持つて來させることになつてゐますの、箆筒は隣の三疊の部屋に置くことにしませうね、」と云つた彼女の髪が丸髷であるのに目を見張りながら、私は併し心の中で、よく考へれば初めから分つたことであるが、今更らしく私の計畫の裏切られたことを悲しみながら、「これで大抵道具はいいと思ひますけど、また気がついたらだんだんに買つて來ておきませう、」と彼女が云ふのを、「ああ、さうしよう、さうしよう、」と上の空で返事した。

私は、實際、その光景を見て、きやつと叫んで逃げ出したい思ひであつた。元、私の求める私の部屋は私の安息の部屋でなければならなかつた。私がもつとも接近して住まねばならぬ者——私の家族からも離れ、さうして隠れて、私が完全に私一人を楽しみたい爲めのものでなければなら

なかつた。が、これは凡そその反對のものであつた。何故といつて、去年私が東臺館の部屋でしたやうに、この部屋の壁の彼方此方に、山の寫真やさよ子に似てゐる十九世紀の白耳義の詩人フエルナン・セヴェランの肖像の寫真などを張りつけたなら、この部屋の別の主人であるところの彼女は立所にヒステリイを起して、それ等の寫真をことごとく烟に變へてしまふであらう。私が一人の空想に耽るために、寝ころんで一時間も二時間もぼんやりと天井を見てゐたら、彼女はたちまち疝癢を起して、何を考へてゐるんです。私がそんなに邪魔になるなら、いつでも歸りますよ、さよならと叫んで、歸つて行く代りに泣き出して、私の最早や半分禿げた頭に残つてゐる髪の毛を引き抜くであらう。——だから、この部屋は私が楽しむどころか、初から義務のやうにして通はなければならぬ部屋であるのを見出さねばならなかつた譯である。

「あなた、わざわざ自分の立派なお家があるのに、こんな餘所の部屋にゐらつしやるのは勉強をした^をいからつて云つたぢやありませんか？」彼女は詰問した。「それなのに、どうしても昨日も一昨日も來なかつたんです。私に會ふのが嫌だからですか？ 私は夜分に來ませんよ、私は藝者ですから、夜分は稼がなければなりませんからね。」

だが、私が出かけて行くと、大抵の晩は、遅くなつてか、或ひは九時頃からか、また或る時は

酒のために顔を眞赤にして「ああ、今日は晝間から出たので疲れたわ。だから、骨休めに來ましたの」などと彼女は云ひながら、屹度そこに姿を現はすのであつた。だから、私が一日でもそこへ行くことを怠ると、忽ちそれが彼女に知れて、彼女の怒りを買ばねばならなかつた。――

その頃のことであつた、山のさよ子が再び名前を變へて藝者に出たといふ知らせがあつたのは。だから、私は心でいつも山の彼女のことを頻りに考へながら、もうあの部屋で勉強することは斷念して、せめて晝の間だけ私の家の四疊半で出来るだけせつせと勉強し、夜になると嫌な勤にでも出かけるやうなつもりで、その仕事師の二階に向つて出發した。一日中で、せめては私の家を出て、上野公園を通つて、それから明るい町に出て、三十分ばかり電車に乗つて數奇屋橋まで行く、唯それだけの間を私の最も楽しい時間に數へねばならなかつた私は、その間だけ私の仕事である文章を書くことも、その爲め取引をする雑誌社との約束のことも、私の家のことも、また仕事師の二階のことも、彼女のことも、出来るだけ一切のことを忘れて、私自身の空想を追うことに費してゐた。公園の、去年、博覽會のあつた跡はもう大部分取拂はれて、私が或る木と木の梢の間からその建物の一つの屋根を眺めて、山の町の湖水と見間違ふのを樂んだことなどを、微笑と共に思ひ浮べながら暗い寒い道を行くのであつた。

その頃私の母は耳を病んで、毎日夕方の食事を濟ますと神田の醫者に通つてゐた。母も私の妻も私が毎日そんなに日が暮れると驛長のやうに規則正しく外に出て行くことを、初のうちこそ心にかけてゐたであらうが、この頃ではもうそれを當前あたりまへのやうに考へてゐた。恐らく私の留守の間には彼女等が火鉢を挟んで向ひ合つた時、彼女等は、それに就いて話し合ふより、より多く無言の中で、私が何處で何をしてゐるのだらう、と心にかけてゐたに違ひなかつたが、今更そんな事を私に問ひ直すことも、私に忠告することも悉く無駄であらうと諦めてゐた。餘所の家の人たちは、どんな風に暮してゐるのであらうかと彼女等はときどき考へた。矢張り、私たちの家のやうに、一家の主人が何をしてゐるか、何を考へてゐるか、外に出たら何處へ行くか、家の者は知らずにゐるのだらうか、いやいやそんな筈はない、これは自分たちの家だけのことであらう、して見ると、自分たちの家の主人に不思議な氣質の男を持つたことを諦めるより外に仕様がないだらう、それは無論贖金を拵へてゐるとか、悪い商賣をしてゐるとかいふ様なものではなからう、恐らくは秘密な女でも拵へてゐるか、或ひは花柳の巷にでも足を踏み入れて、そこらの女にでも熱中してゐるからであらう、それも仕様がなだが、どうかその爲めに自分たちを見捨てるやうな大事が起らぬよう、おお、それも併し起つて見れば何とも仕様のないことだが、……と彼女等は考へた。

私の母は三十歳になつたかならなかつたかの頃に夫を失つて以來、今日の日まで寡婦の生涯を送つたのであつた。また私の妻は早く眞の両親を失つて二十歳から三十歳近くまで、先きに述べた田舎の町で藝妓をして暮してゐたものであつた。さういふ境遇は彼女等に物事に無抵抗的なあきらめの心持を多分に持來したに違ひない。

「ねえ、母さま、私の妻が、私の留守の時、私の母に向つて、ともすると眞剣な口調になりさうなのを、彼女は一所懸命に冗談のやうにして「私たち、若しおいてけぼりにされるやうな事がございましたら、月々手當をもらつて二階でも借りて暮して行きませうね。そしたら、その方が却つて氣樂かも知れませぬね。」

「本當にその方が氣樂かも知れないよ。」私の母も冗談らしく併し寂しい笑聲を以て應じた。「さあ風呂へでも行つて温まつて來ようか、また雪でも降るのか知ら、寒いね。」――

だが、私が珍しく私の四疊半の部屋に閉ぢこもつて、夕方の食事を終つてから、これも珍しく机の前に坐つて、読みさしの本を讀んでゐると、梯子段に母の足音が聞えて、彼女は向側の部屋から私の部屋に向つて聲をかけた。

「今夜はもう出かけへんの、何處か身體の工合でも悪いんぢやない？ 私、これから神田へ行こ

と思ふんやが、お前、出るんやつたら途中まで一緒に行けへん？」

「ええ、お供ませう。」と私は答へて、彼女に私の部屋に這入られることを恐れるやうに、自分から隣の部屋に立つて行つた。

彼女が神田の醫者に通つてゐた頃は毎晩晴天つづきであつた。私の家から電車通に出るまでに通らねばならぬ公園の道は可なり長かつた。そこは暗くて元より人家のないところであつたからしぜん天の星などが最も多く目に止まつた。私たちは共に口數の少ない性質であつたから、その長い道の間に幾言も言葉をかはすことがなかつた。その頃、さうして私は母と十度以上も毎晩そこを通つたものであるが、その間に二人が交した言葉を總計しても恐らく一枚のレコオドの片面に吹込んで餘る程であらう。

「ここの所へ來ると、いつでもあの大きな木の眞上のところに、三つ星さんが並んで見えるの、」と母が云つた。

「ええ、」と私は答へた。

しかし、三つ星は誰にも懐しい星に違ひなかつた。恐らく私もさうであつたやうに、私のその頃よりも又三四十年前も前には、私の母もあの星を見出して、三ツ星の歌をうたつた記憶があるに

違ない。その證據に、彼女は私とその夜の公園の道を歩いた何度かのうちで、この同じ三ツ星のことを一再ならず話題にした。すると、私は、忽ち、山の子持藝妓のことも、數奇屋橋の仕事師の二階の部屋で會ふ女のことも、私の家にゐる妻のことも、ことごとく忘れて、子供のやうな心持になつた。母と竝んで着物の袖をすれすれに歩いてゐると、三ツ星が云つの間にか濡れて見えて來るのである。

「わしはいつもここへ來ると、さう思ふの、」母は動物園の前を通る時いつた。「ここへ突然この中の獅子や虎が檻を破つて出て來たら、どうしようと思ふの、恐いわね。」

「そんなことは滅多にありませんよ、」と私は云つた。

「さうかね。今頃、獅子や虎はみんな寝てるやろか。やつぱり夜になつたら寝るやろな。獅子の仔はどうしてるやろ？」

「矢張り寝てるでせうね。」

また別の時彼女がいつた。

「私、お前に頼みがあるの、しかしお前の都合のええ時でええんやけど……」

「何です？」

「……わし、毎年三月のお節句が來るといつもさう思ふんやけど、……」彼女は遠慮しいしい、

「わし、木に彫つたお雛様がほしいの。それやお前の都合のええ時でええけど、……お節句が濟んでからでもええ……。」

私はふと笑ひ出しさうになつたが、直ぐ鼻の中がきゅつとなつて、「何だ、そんなことですか。ええ、去年もたうとう買ひませんでしたね、今年は何とかして買ひませう。」

「此間、淺草へ友子と一緒に見たとき見といたんやけど、あれはもう賣れたか知ら？……家には人形は、友子の持つて來たのが一つある切り、外に碌なのがないんやからなア。」

「さうですね。」

「ほら！」彼女は私たちが精養軒の横手を大通に出たところで、突然空を指さしながら、「ここからも、あそこに三ツ星さんが綺麗に見えるやろ？……」

さうして公園を通り抜けたところで、電車か乗合自動車かで私たちは須田町まで一緒に行き、そこから私は數寄屋橋に向ひ、母は大抵そこから歩いて小川町にある醫者の家に行くのである。だから、歸りは無論別々であつたが、その間に私たちの間に交される言葉はそれだけが凡そ一日分であつた。併し、彼女は、その事を、こんなにも大きく成人した息子と一緒に、たとひ二十分

でも三十分でも、一緒に並んで歩くことを、楽しみの日課にしてゐるらしかつた。私にも亦さうであつた。彼女はもはや六十歳に近かつた、さういふ老女が次第に獅子や虎や、三ツ星や、さてはお雛様やお人形に就いて、謂はば童話の國に思ひを寄せてゐると見えるのが、私に何とも云へぬ甘い悲しみを覚えさせるのである。けれども又、いふまでもなく、彼女にも、その外にさまざまの此の世の心配が残されてあつた、さうして、それに就いて、彼女は彼女の唯一人の息子である私に、相談したり、打ち明けたりしたい、と思つてゐるのであらうが、いつも家にゐる時は二階の自分の部屋にこもつた切りで、食事にさへ減多に顔を出さない私に、それをする機會を持たないのを物足りなく思つてゐるに違ひなかつた。さうして又、母の心として、子はすゑん頭を使ふ仕事をしてゐるのだし、自分たちの心配に就いてはこれ迄ともいつも何にも口には出さないが、彼一人の胸で判断して裁いてくれるだらう、それにそんな事を改めて女や老人から話しかけられるのを好まない性質と見えるから、と遠慮してわざと持出さないらしかつた。けれども、さすがに女心の胸に餘ることがたまつた時、或ひはどうしても直接に私に相談しなければならぬ時、さういふ時が幾つも重なつて、彼女の腹はふくれて來るのに違ひないのである。それを矢張り公園の道を歩きながら彼女が云つた。

「お前、月に一度でも二ヶ月に一度でもいいから、活動へでも物を食べにでも、友子を連れて行つておやりよ、」その調子は矢張り遠慮しいしいではあつたが、さすがに動物園の話とは幾分違つて聞えた、「餘所の夫婦はどこの人でも、お前のやうな人はあれへん。一週間に一ぺん位は屹度二人で散歩に行くもんやのに、お前たちは未だ一ぺんも二人で外へ出たことあれへんやろ？」

「一度公吉と三人で鳥屋へ行つたことがあります。」と私は云つた。

「たつた一ぺんやないか、」彼女が続けていふには、「考へて見れば友子が可哀さうや。わしのやうなもんでも、姑となると遠慮もあるやろ、親の家はないし、身内らしい身内はないし、……女中でも此頃は月に一度の休日があるんや……、あの子には今日が樂みといふ日イがあれへん。ね、本眞まことに何處へでもせめて月に一ぺん位は連れて行つてやりいな。」

「ええ、さうませう。」

これも亦或る晩の公園の道中での彼女との會話であつた。

「公吉のことね、」と彼女は云つた。公吉といふのは、先きに云つた私の従兄弟で、即ち彼女の兄の子であつた。彼女の兄は今から七年前に三人の子を残して墓に行つたものであるが、彼と彼女とは生前決して仲のいい兄弟でなかつたばかりか、彼女が長い貧しい寡婦の生活中にも彼は一

向彼女の面倒を見なかつた。彼女はいつも彼を薄情な兄だと恨んでゐた。が、彼の甥である私は中學時代をすつと彼の家の釜の飯を食べてゐたのである。所で、七年前に、伯父は死んで行く病氣で三月程床に就いてゐた時、ふと此世の果敢なさを感じたものであらうか、當時私はまだ自分一人の下宿代さへも支拂ひ兼ねるやうな状態で、母を抱いて苦んでゐたが、或る日突然彼女に来てくれるやうにと電報を打つて来た。これは恐らくこの兄妹が一生のうちで、幼年の頃は知らないが、何方かが何方かを懐しく思つて呼んだ最初のさうして最後だつたに違ひない。彼は多分五十五六歳で彼女は五十二三歳であつた。長い間薄情な兄だと心に恨んでゐたものであるが、彼女は、この電報に接すると、私がやつとの思で調べた旅費を待ち兼ねるやうにして、彼の病床に飛んで行つた。私はこの時のことを思ひ出し今かうして筆を取つてゐると次第に自分の書いてゐる文字が潤んで見えなくなつて来る。人情の自然さが私を打つのである。その時彼女は五六年振りで彼女の兄と會つたのである。

「お良さんも急に年をとつたね、」病の兄が妹の顔を見るなり床の中から云つた、「東京へ行つてずるぶん苦勞してゐるらしいな。清次はまだ芽が出ないと見えるね。」

答の代りに母は涙ぐんだ。彼の言葉どほり彼女は東京にゐる子の私の傍に来て三年になるが、

全く口に云へない苦勞をつづけてゐたのだつたから……併し又、彼女は、さういふ兄が、三月後にたうとう墓へ行つた位であるから、めつきり瘠せ衰へてゐるのを見た。彼等はその瞬間しみじみ兄妹の情を揺すられたであらう。その時、公吉は十歳であつた。死んで行く伯父は、子の公吉の行先を案じて、甥の私に後事を頼みたかつたといふ理由も勿論あらうが、それと共に彼は本能的に一生不幸であつた妹を悲む心や、自分が世話して今は男一人前の年になつてゐる甥が、未だに碌碌として暮してゐるのを案ずる心やに充たされたのに違ひない。

併し、今は私も、その公吉を私の家に引取つて、どうやらかうやら一家を持つ身の上になつたのである。幸に、公吉も中學の三年生でいつも一番か二番の成績をとつてゐる。今、私の母が公園の道を歩きながら、「公吉のことね、」と云つたのは、此頃彼の國にゐる母が、私の伯父の妻で先きに述べた、男女に就いて私に教訓した伯母である、この人はよくある女の癖で目先の事ばかりに心を取られる性分で、誰かに公吉を中學など止めさせて銀行の給仕にでもしたら、母親の傍にもゐられるし、又僅でも月給がとれるから、などと唆かされたらしい、——そんな事を手紙で云つて来たのである。無論、それには、私も、私の母も、當の公吉も不賛成なのであるが、此頃頻りにその催促の手紙を遣して、うっかりすると公吉を迎へに來兼ねないのである、その事を母

は心配して云ひ出したのである。死んだ伯父は私を愛してくれた。彼は、彼の妹である私の母の面倒を見る代りに、理窟でなく感情で私を愛を以て世話してくれた。今、私の母も、彼女は彼女の兄が生前彼女につれなかつた事は傍に置いて、彼の子である彼女の甥を理窟でなく感情を以て愛してゐると見えるのである。

今はだんだん春の試験が近づいて来たので、公吉は彼の居間である小さな二畳の部屋で、毎日學校から歸つて来ると一心不亂に勉強してゐる。さうだ、春と云へば、私の家の四坪ほどの小さな庭の一本の楓の木は、昨日まで、あるひは雪だつたり、風だつたり、氷だつたり、氷雨だつたり、まだ一日として草木の滋養になる日があつたとは思へないのに、何といふ季節の力の素晴らしさ！ それ等の枝々にはもはや紅い芽が萌して見えるのである。この季節は、私の経験に依ると、人の心の常規を失はせる、現に私が斯うして七年前の伯父と母の様子を書いてゐる最中にも、突然感傷的な氣分に襲はれて原稿紙の字が潤み見えるのもその爲めであらうか、頭痛持の頭が三日に上げず痛み出したり、私の母の耳が悪くなつたり、疝性な氣質のもの疝が高ぶつたり、急に世の中が嫌になつたり、不平の感情が高まつたり、苛々し出したりするのも、皆この季節の持つて来るものであらうか。それは併し、又私の考へに依ると、人々は、どんな人々にも、それぞれ

の不平や、屈託や、悲しみや、怒りや、喜びやがある、それは、廟堂の大臣にも、市井の紙屑屋にも、同じことである、固より、男にも、女にも、老人にも、子供にも同じことである、が、人はそれぞれの性質に依つて。或ひはさまざまのこの世の習慣や、禮式や、束縛や、壓迫やのため、大抵の事はそれを胸に收めてしまはねばならぬ、さうして私がいつか子供の頃に田舎の蠶の部屋で見たそのやうに、唯桑の葉に纏れてぶちぶちむちむちと、それを嚙む音の外無言の營みを營まねばならぬ、さうして私の考ではそれを噴き出させるのがこの季節であるのだ、即ちこの季節になつて、諸諸の人は、頭痛になつたり、疝癢を起したり、憂鬱病に罹つたり、一口に云ふと男女に拘らずヒステリーの状態になつたりする、つまりヒステリーとは人がこの世に對する反抗の爆發といふことになるのであらうか、さうしてこれこそ凡人に與へられた最も生き甲斐ある時であり或るひは最も正直に生きる時ではないだらうか。――

「あなた、公吉さんがお部屋でさつき何だかしく泣いてゐらつしやいました、」私の妻が私に云つた、「別にお泣きになるやうな譯つてないやうに思ひますのに……。」

多分少年の彼も亦この季節の病氣に見舞はれたのであらうか。

「今どうしてゐる？」私は暫くしてから聞いて見た。

「寝てゐらつしやるやうです、」と彼女は答へた。

その晩、彼女が又いふのに、「秀の云ひますのに、公吉さんは何かあなたの本を読んで泣いてらしたといふ事でございますが……？」

「僕の本ツて、僕の書いた小説本の事か？」私は少し驚いて聞き返した。私は不斷自分の書いたものは一切家の者に見せない規則にして、さういふものはことごとく鍵の掛る本箱の中にしてしまつてあるのである。「そんなものどうしたんだらう？」

「お友達の方にも借りてらつしたらしいんですよ。」

その話はそれ切りになつたが、その翌日私は何かの用事で公吉の部屋に這入つたところが、果してその机の上に私が昔書いた一冊の小説本が乗つてゐた。そこで、彼がそれを読んで泣いてゐたといふのはどういふ所だらうと思つて、いきなり明けて見ると、葉が挟んである所は、先きに述べた私の母と彼女の兄、即ち公吉にして見ると彼の父と彼の叔母とが、彼の父が、死の三日前に、何と思つたのか、彼の妹に三味線を弾かして、彼が病床の中で彼の得意の清元を歌ふところを書いた一文であつた。私は、それを元の通りに伏せておいて、急いで二階の自分の部屋に歸つて來た。そして鍵で本箱を明けて、同じ本を出して、同じところを読んで見ると、私も亦私自身

の其頃の事を思ひ出して、急に心が感傷的になつて來たので、元の所に伏せてしまつた。

同じ時分の或る晩のことであつた、その頃、私は密かに旅の計畫をしてゐた、それは例の山の町で一年半振りで藝妓の披露目をしたと云ふさよ子に會ひに行く目的であつた。私は、その行先を妻に明かすことが出来なかつたので、考へて、——何處か別の土地に行つてゐる友達に頼み、その友達からその土地の繪葉書を送つてもらつて、その繪葉書の一二枚に、私がその土地にゐる體にして宛てた簡単な消息文を認め、それを改めてその友達のところへ送つておいて、或る日私がさよ子の町へ行つてゐる間の程よい日を見計つて、その友達から、豫て送つておいたその繪葉書を私の家へ出してもらふ、——といふ風にして、私の行先を晦まさうと計畫したのであつた。そこで、その時のために、私は妻に、突然いつて彼女を驚かさないうちに、近いうちに一度氣保養がてら旅行して來たい、と前もつて云つておいたのである。で、その晩も私は何氣ない顔をして「近いうちに仕事に旅に出るかも知れないよ、」と彼女に云つたのであつた。——

彼女は近頃雑誌や書物の記事を手引にして毛絲の編物細工を稽古してゐた。その時も、電燈の下で、二本の長い編針を黙つて動かしてゐたが、私のその言葉に長い間答へなかつた。が、その沈黙は何か答へようとする氣色を十分現してゐるやうに見えた。だから、私が、その時頻りに雜

誌か何かの頁を鹿爪らしく繰りながら、實は彼女が何と應じるかの期待で心を空にしてゐたやうに彼女も亦夢中で編針を動かしてゐたに違ひなかつた。彼女の無言は、私に、何故となく訴へるやうな咎めるやうな氣色を感じさせた。

「あなた、」たうとう彼女が口をきつて、「何か私に打明けて下さらない事があるでせう？」

「僕はお前にも家の者にもいつも何も打明けない習慣ぢやないか。」

「それはさうですけど、でも……」彼女はそこまで云つて、又長い間言葉を切つてから、「ね、私に打明けて下さつてもいい事で……？ お分りなるでせう？」

「分つた！」私は云つた。「さよ子君が又出たといふ話だらう？」

「ええ、……私、いつか、あなたの机の上に、何處から送つて來たのか、田舎の新聞が散らかつてゐましたので、ふと何氣なしに明けて見ますと、赤い筋で括弧がしてあるところがありましたので、それで讀んだんです。——今度はいつもあなたの小説に書いてある名を名乗つて出たと云ふぢやありませんか？」

「さうのやうだね。」

私は、そこで何の用もないのに、何故かさうしなければならぬもののやうに、彼女の頭の上の電

燈の傍に寄つて行つて、手にしてゐた雑誌を特に明るい所で讀むやうな恰好を装つた。それ切りで私たちの會話は跡切れてしまつた、で、ちよつとの間實にしんとした。彼女が鼻をすする音さへ、泣いてゐるのではないかと疑はれるやうな静かさであつた。私は雑誌の頁から目を反らして彼女の手元を覗いて見た。と、ふと私の目に止まつたのは、彼女が長い二本の編針を又の字に組んだやうな恰好の中に、仕上げつた毛絲の細工物が、それは多分肩掛か何かだらうと此間から想像してゐた私の意外にも、派手な毛絲を使った赤ン坊の帽子であることだつた。

「何だい、それは？」私はちやうど言葉の接穂を失つてゐた時だつたのを利用して、分つてゐながら尋ねた。「子供の帽子ぢやない？」

すると、彼女は、答へる前の瞬間、その細工物を胸の中に抱き隠すやうにして、

「ええ、」と小さい聲で答へた。

「何處かへやるのかい？」

「いえ、別に……」

私は、急に何か用事を思ひついたやうに装つて、急いで四疊半の私の部屋に歸つて行つた。私は机の前に坐つてからもいつになく彼女の身の上が案じられた。茶の間の電燈の下で、俯向いて

誰といふ當もない子の帽子を編んでゐた彼女の頸筋の邊が、彼女に子がないといふ譯ばかりでなく、電燈の光線の明暗のせむか、いたく心細さうに見えた畫像が、私の目から消えなかつた。何にも私の母が云ふ通り、彼女は孤獨なものであるといふ事が、その時ほど私に具體化されて見えなかつた。私には心を傾ける仕事があるし、母には動物園や星の夢があるが、彼女はそれ等の何にも持たぬのである。私はいたく悲しくなつたので、その晩は、又の日に會つた時どんなに女の怒りを買ふことがあらうとも、例の數寄屋橋の二階に行くことを止めて、せめて妻と話し合はぬ迄も、彼女の傍で肩の凝らない本でも讀まうと考へた。が、それから十分と立たなかつた時、母が階下から上つて来る足音がした。その前に、階段の下で、彼女が妻にこんな事を云つてゐるのが聞えた。

「この頃、清次は滅多に出かけないやうだが、何處ぞ悪いんやないか？」

「いいえ、別にそんな様子も……」その後で、何かぼそぼそ云ふ聲がした。やがて、母だけが上つて来て、私の部屋の方に向つて、

「今夜、出えへん？ 出る？ 友子が山下まで買物に行きたい、と云つてゐるので、三人で山下まで行きやへん？」

「まわりませう。」

この私の返事を聞いた時の母の嬉しさうな顔は、六十歳の母の笑顔が幼児の笑顔のごとく見えた。その無邪氣な笑顔は私の頑な心をやはらげた。

「ぢやあ、早速、友子に云うてやる、階下で待つてまつせ……」

私は、あだかも戀人と一緒に出かけるやうな氣持で、いそいそと出仕度をした。階下へ下りて行くと、既に仕度の出来てゐた妻が、母の後から

「いいでせうか？」と尋ねた。私は返事の代りにうなづいた。

「公吉、留守番してや、」と母が云つた。

「行つてらつしやい、」と公吉は不思議さうな顔ににこにこした笑ひを浮べて云つた。

さうして、私たち親子三人は、連れ立つて、家を出た。それは、唯公園を北から南に通り返けると上野山下から須田町迄の電車に同乗するのと、それだけの道であつたのだが、私たちの四年來の初めての出來事であつた。が、私たちの交した口數は至つて少なかつた。動物園の前に來た時、「お猿は今頃どうしてるやろ？ いつやつたかな、もう二週間になるか知ら？」と母が妻に云つた。

「この前一緒に見に來たのは？、——あの時お中の大きかつたお猿はもう生んだかしら？」

「もう生れたかも知れませんか」と妻は應じた。

「明日のお晝からでも見に行こか。」

さうして私は須田町で彼女等と別れて數寄屋橋へと向つたのである。その頃は、或る晩は北の方から明日は雪を約束するかと思はせるやうな冷たい風が吹いたり、かと思ふと、その翌晩は地震でもありはしないかと思はれるほど變に温かだつたり、柱曆を見ても二十八日の次ぎに突然三月一日と記されてあるのに驚かされるやうに、とりわけ季節の變化のあわただしさの感じられる時であつた。數寄屋橋の仕事師の二階で私の會ふ女は、その善良なことは喇叭を以て吹聴しても間違ひではないが、同時にさういふ性質のものが、その職業と境遇の影響から陥り易い、ずるぶん我儘者であつた。

又さういふ堪へ性のない女の當然の傾向として、この季節の變化の氣分をその身心に甚だ鋭敏に感じるものらしかつた。だから、私は、晝間は私の妻の極端な堪へ性を見て、夜は私の情人のその正反對な性質に接する譯であつた。彼女は一晚のうちに、それも私と彼女と會つてゐる時間はせいぜい三時間以上ではなかつたが、これといふ譯もなしに必ず泣き顔と笑ひ顔とを交る交る

何度見せるか知れなかつた。私が、折角自分の手に入れた部屋なのであるからと思つて、ぼつりと家から私の本や晝の額やを運んで、初め彼女が私に用意した人形や羽子板やと、目に立たぬやうに置き換へておくと、彼女は、機嫌のいい日はその私の趣味を褒め、反對の日はそのことを罵倒した。そんなら、一應この部屋を引上げようと私が機嫌を悪くして云ふと、彼女は忽ち泣き出すのである。私は、かういふヒステリーの女の氣質を、以前さういふ氣質の女と關係して苦勞した經驗を持つてゐるだけに、人一倍に了解し同情した。

ところで、私はしばしば次ぎのやうな事を考へることがある、各々のヒステリーの女達は、世間一般の男からは相手にされないし、間違つてそんな男と知り合つても忽ち仲違ひになつてしまふものだし、さういふ事を知つてゐて、彼女等は、ヒステリーだけが持つてゐる天才的な直覺力で、男を見るととき最初の一瞥で相手が自分に適合するものであるかどうかを見別ける、といふよりは本能的にさういふ男に心を取られる、それはちやうど神様が人間以外の諸動物にそれぞれ附與してあるところの自衛の本能に似てゐる、さうして私のやうな性質のものは屢々ヒステリー婦人に見出されるものではないか、と。

それは三月二日のことで、私は、夜の十二時近くに、數寄屋橋の二階から、歸り道を女と二人

で、須田町まで歸り電車に乗った。『須田町は、電車の別れ路、さうして女との、別れ路』——何のことか、かういふ呂律の廻らない文句が、いつとなしに私の頭の中に出て来て、私はここへ来る度にいつもこの文句に出鱈目の節を付けて口ずさむ習慣になつてゐた。『交通巡查よ、電車の旗振りよ、さうして目に見えぬ神よ、私を守り給へ！』そこで私たちは、彼女は左に、私は右に、別れて、ああ今夜は又冬が来たやうに寒いな、と獨言ちながら、さうして先きに述べたヒステリイ婦人説の如きものを考へながら、私は私の家へと向つた。——

毎晩そんなに遅いので、表の戸だけ締めかけて、家のものには先きに寝てもらふことになつてゐた。私は、戸を明けて、戸を締めて、こそそと鍵をかけて、さて上つたところが二疊の玄關の間で、その次ぎが直ぐに二階に上る階段になつてゐる。階段の横手を通り抜けた突當りに、從兄弟の中學生の公吉が寝てゐるのである。又、玄關の右手の四疊の間には女中の秀が寝てゐるのである。が、私はいつもする通り階段の右手の奥の間に通じる唐紙を明けて、その右側の壁の釘に私の外套を脱いで掛けた。云ひ忘れたが、私がどんなに云ひ合せておいても、私の妻だけは必ず私の歸るまで起きてゐるのが習慣であつたが、その二三日前から彼女は風邪のために、二階で寝た切りであつた。だから、彼女は私の歸つて来た氣色けいしきを聞いても、いつものやうに迎へには下りて来なかつたのである。だが、私が今云はうとするのは、そんな事ではないのである。

母の寝てゐる奥の間は六疊で、その右の隅に間口一間半で奥行二尺ぐらゐの變な床の間があつた。そこに戸棚になつてゐる高さ二尺位の置床が置いてあつたが、彼女はいつもその床の間に添うて縁側のある南の方を枕にして寝てゐた。年寄のことで、さうして借家住居のことであるから、隙間の風が寒いといふので、彼女は枕元に屏風代りに四枚折のへら臺を立てて、枕元に煙草盆と煙管と、眼鏡と、童話雑誌と、さうして果物が好きなので、大抵蜜柑か林檎かを一二箇と、それだけの子供がよくさうして並べることを楽しむやうに、正しく飾り並べて眠つてゐた。だが、これは私がいつの晩でも便所に通ふ度たひにここを通るので見馴れてゐる光景であつたから、今更私の注意を引く程のものではなかつたが、否……私がその晩その部屋の唐紙を明けるなり最先まうさきに私の目についたのは、その寝てゐる彼女と並行してゐる置棚の上の光景であつた。おお、私は由な自分自身の夢や痴情に耽つてゐて、今年も彼女の希望に副はなかつたのである、何故と云つてその床の間には、いつもの、それは私の妻が田舎にゐた時分に、名もない畫家の會か何かで買ったものに違ひない、山水の掛物の代りに、一對の立雛を畫いた掛物が掛つてゐるのを見出したからである。だが、その次ぎの瞬間、私は「はて？」と思つて、そつと、寝てゐる母の目を覺まसान

いようにその傍に近寄つて、目を凝らして見て、忽ち電氣に打たれたやうに感動しなければならなかつた。といふのは、それは別の掛物ではなくて、いつもの山水の掛物を裏返したものの上に、玩具屋に賣つてゐる色紙でこしらへた立雛の紙人形を、即製に張りつけたものなのであつた。私は思はず微笑した。が、それは唯一瞬の微笑で、微笑の直ぐ次ぎに目頭の暑くなるのを覺えた。

私は目をしば叩きながら掛物の前に桃の花の活けてあるのを認めた。それは私の妻の丹精であつた。その活花の傍に彼女が持つてきた可なりな時代物の人形が、それは母が常に『家には人形らしい人形は友子の持つて來たのが一つしかない、』と嘆いてゐたところのものであるが、最早その着てゐる友禪の着物も古く、中にもその顔は多年の塵をかぶつて赤黒くなり、ところどころに黒い染さへあるやうに見えるが、ぼつねんと壁にもたせかけて、多少斜めに傾いて置かれてあつた、さういふ場合のさういふ人形に限らず、日本の人形といふものは、じつと見詰めてゐると實に物悲しげな顔をしてゐるのが常である。そのつやつやした心持ふくれた頬の具合といひ、そのおかつばの髪の毛といひ、中にもその變に潤うるはひのある光つたその目の玉といひ、それ等の總てが持つてゐる表情は、何ともいへぬ憂ひを湛へてゐるものである。ましてこの場合、寢てゐる母の傍で、彼女の安息を見守るやうに、置床の上で、安定の位置を失ひ半ば傾きかかつたままじつと

してゐる人形の顔は、人間にない人形獨特の表情を浮べてゐた。その爲めに却つて私の心を感傷的にした。人形の横に、何合入かの瓶詰の白酒がぼつねんと貧弱さうに立つてゐて、その又傍にいつの間に仕上げたのか、いつか妻が編んでゐた毛絲の子供帽子も飾つてあつた。

けれども、幸なことに、その翌朝は、昨夜と變つて、ほのぼのとした温い日が射した。私たちは、いつか日の位置も變つて來たと見えて、それがその六疊の部屋の手まで這入つてゐるのを珍しい出來事のやうに話し合ひながら、いつになく私も口數多くなつて、朝の食卓に、母と、妻と、従兄弟と、四人そろつて着いた。裏返した掛物に張りつけられてある立雛の話も、私たちを愉快に笑はせる材料になつた。それは、昨夜、母と妻とが湯屋の歸りに思ひついて買つて來たといふ話であつた。冬の間ほとんど明けたことのない縁に向つて障子もその朝は一ぱいに開かれた。庭の中のたつた一本の木である楓の木の芽が、めつきりふくれて來たことも、私たちを陽氣にする話の種になつた。さては、これも私たちの家族の一員に違ひない一疋の犬も、日の蔭を追うて縁側に上つて來て、次第に少なくなつて行く日蔭の中に丸くなつて眠つてゐるのである。彼は、時々ふと目覺めて、私たちの中の誰かと目を見合すと、寝ころんだままで軽く物倦さうに尾を振るのである。

終つひ

の

栖すま

是はまわ終の栖か雪五尺 — 一茶

みちよは、両手に哲太の遺骨を納めた白風呂敷包の箱を抱へて、舅の後に従つた。その六疊の佛間には、造附つくりつけになつてゐる佛壇があつて、隅の方に、大内塗の茶箆筒、立派な紫檀の机などが据ゑてあつて、真中まんなかに大きな支那焼の火鉢が置いてあつた。

舅は先づみちよを佛壇の前に連れて行つた。さすがに舊家の佛壇だけあつて、なかなか凝つた物であつた。みちよは、その前に坐つて、先づ正面の佛像を拜んでから、携へて來た白風呂敷包を解き、遺骨を納めた白木の箱と白木の位牌ほどあひを程合ほどあひの所に置いて、一歩さがつた。舅の秀松が先づ拜み、次に姑の菊、次に子の勉吉、最後にみちよの順で拜んだ。それが済むと、秀松は菊を母屋ははに歸し、みちよと勉吉を火鉢の傍に坐らした。彼は先づみちよに話しかけた。

「東京から且まで汽車が二十七時間。その上に、且から家まで自動車が三十分。それも、半分山道みたいな所ところと坂道ばかり。お負おんけに石ころ道ぢやけ、さぞ疲つかれなすつたらう。そこへ、途中から、あの生憎なげの粉雪の吹雪ぢや。……えらいところへ來た、と思ひなすつたら。……」

秀松は、七十歳を過ぎた老農夫ではあるが、まだ四斗俵が平氣で擔かげるほどの丈夫さ、それに黒い地藏眉毛、鼻下の自然に生えた白い口髭、豊かな頬、——さういふ顔立が表すやうな寛濶な

性質であつた。ところが、一つ、不斷は至つて無口であつたが、氣が向くと、ぼつりぼつりと句切りながら、お喋りをする、といふ癖があつた。

「……佛間ちふと、氣持悪いやうに思ふぢやらうが、」彼獨特のお喋りを始めた。「そのうち、この家の方々の部屋を、見るやうになつたら、この部屋が、この家ぢゆうで、いつちええ、いつち静かな、落着いた、部屋ちふことが、分るぢやらう。その證據に、十年程前、哲太がまだ此の家にゐた時分、彼奴は、この部屋が大の氣に入りでナ、……又、あの茶箆筒も、あの机も、この火鉢も皆、哲太が使ふとつたもんぢや。……まあ、まあ、そのやうな事は、どつちやでもええ事ぢやが、わしは、この部屋を、ずーッと、あなたの居間にして上げたい、と、かういふ考へから、むかしの話までした譯ぢや。……」

みちよは、禮の言葉の返事の代りに、うなづいて見せた。

「まあ、居間は、この部屋に極めてもらふ事にして、」秀松のお喋りはつづいた。「……今度は、勉吉のことぢやが、今年十六になるのぢやが、いろいろな譯——ちふのは、みちよさんには、ちよびつと耳が痛からうが、親父の哲太が、村を出てから、八年も歸つて來ない、手紙だけは、ときどき、思ひ出したやうにくれるが、それも、この二三年は、一年に一ぺんか、ひどい時は、一

年に一ぺんも、葉書一枚よこさん、……その代り、みちよさんが、雑誌とか、手縫のカバンとか、懷中電燈とか、いろいろ送つてくれるので、仕舞には、勉吉は、東京の父ちゃんといふ言葉は、それこそ、一年に二三度しか使はんで、東京の母ちゃんといふ言葉は、また「東京の母ちゃん」が出た、と人が呆れて云ふほど使ふ。……今日、八年ぶりで、骨になつて歸つて來よつた、佛の悪口をいふのは、悪いこつちやが、哲太は、親に不幸ぢやつた何層倍も、子に不孝な奴ぢやつた、……南無……南無……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……天稟院文賢……天稟院文賢獨念居士、天稟院文賢獨念居士……と、何處まで話をしたかしら、……うむ、いろいろな譯から、後れとつて、今、Hの小學校の高等二年に通ふとるが、來年は、どうでもかうでも、中學の試験を受けさせた、と思ふとるんぢや。尤も、尋常六年を出た年にも、高等一年を済ました時にも、Mの親類の方から、何處で聞いて來よるんか、Mの中學イ入つたら、ちふ話を二度も持込んで來よつたんぢやが、わしは、その度に、東京へ、あんた知らんかな、哲太に手紙で知らしてやると、哲太の返事は、いつも極つとをる、……Mの親類の世話には絶對になるな、中學イやる位なら、もう少し待つて下さい、勉吉を東京に來させて、試験なしに行ける中學を見つけて、入れてやります、と、かう云ふんぢや。わしには、かういふ哲太の腹よう分る。みちよさん、氣を悪くせんで聞いて下

され、Mの親類ちふんは、あんたも薄々知つてるかも知れない、哲太の離縁した……ナニの弟ぢや。哲太が嫌ふ筈ぢや。……」

先きから、始終俯向いて、細い目を一層細くし、持前の憂ひ顔を一層憂ひ顔にして、瞬き一つしないで、息を詰めて、秀松の話に聞入つてゐたみちよは、「哲太の離縁した……ナニ——言ひ換へると「哲太の離縁した先妻」といふ言葉が秀松の口から出た時、何とも云へぬ憂鬱な表情をその持前の青白い顔に浮べた。それは一般に見る先妻に對する後妻の反感とか嫉妬とか云ふ種類のものでなく、今の秀松の言葉から、豫て彼女の心の中に少しづつ崩してゐた『母の愛』が、思ひがけなく溢れ出してゐたところへ、突然水を差されたやうな気がしたからである。その時、彼女は三四年前、まだ哲太が元氣のよかつた頃、その頃はよく一時的ではあるが激しい諍ひをした、二人の間に子供が有る無しで諍ひが起つた時、その諍ひの終る頃に、彼女は彼に次ぎのやうな言葉を云つた事を、思ひ出した。

「……私、お國のお家に連れて歸つて下さるのなら、お舅様お姑様を大事にします。お家の仕來どほり麥刈も田植もします。子供さんも可愛がつて上げます。でも、懐いて下さるか、私、それが無性に心配でなりません。M町の中學校へ行くやうになつてごらん下さい。先の奥様と目と

鼻の間ですから、きつと呼び寄せたりしなさいませよ。何と云つても血を分けた母と子ですもの。自分の生みの親を追ひ出した憎い奴だと私が恨まれて、……それが、あなたが生きてゐらつしやる間は私も氣丈ですけれど、あなたに先立たれて一人になつた時、私、子供さんに復讐されたらどうします。今までこんなこと夢にも考へて見たことがないのに、三十に手がとどくと、急に先きが短くなつたやうな気がして、不安で不安で堪らなくなりましたの。……この世で唯一人、末路の水も飲ましてくれる人が、私にはありません。……」こんな言葉の末まで思ひ出すと、彼女は、あの時は何でもなく云つた言葉が、今は餘りそのまま自分の身上に當嵌るやうに思ふと、止めどなく、涙が頬を傳るのを覺えた。——

「……ところで、わしから一つ、折入つて、みちよさんに、お願ひしたいことが、あるのぢやが、……」秀松のお喋りがつづいた。「今も申した通り、勉吉は、後れてゐるところはあるが、わしのやうな者が見ても、よく出來る學と、ひどう出來ん學とがある、それを、一つ、みちよさん、明日から、仕込んでほしいんぢや。……それと、もう一つ、これは、今晚から、この部屋の隅ついで、勉吉を寝さしてもらつたり、勉強さしてもらつたり、といふ工合に、やつてもらへんぢやるか。……ついでに、又、辨當の世話なども、……その代り、百姓のことは、一切せいでもええか

ら、明日から、食事の方も受持つてくれるとありがたいがな。……こんな風に、思ひ出して行く
と、哲太より、あなたのほうが、わし達のやうな年寄や、勉吉のやうな子供には、何彼につけて、
ありがたい、……本真に、こんな田舎イ、よう来てくれたなア。哲太は不孝もんぢやつたが、あ
んたのやうな人を、残してくれよつたのが、彼奴のせめてもの孝行や。恩に着るよ。……」

みちよは、哲太の危篤の電報で、この老人が上京して来たとき初めて會つたのであるが、その
時、彼女が、彼女自身の初対面の挨拶と哲太と彼女自身の二人分の不孝の詫びの挨拶をすると、
「いいえ、どう致しまして、手前共こそ、哲太が大けえお世話になつて、……」と、疊の上に手
を突き、頭を振りつつ、云つた此の老人との初対面の印象を、いつまでも忘れることが出来ない。
それは唯のセンチメンタルな感激でなく、或る人格から受ける感激であつた。

彼女が、夫のゐない故郷の山家に住み着く氣になつた理由の一つは、この秀松の初対面の印象
からであつた。さうして、その印象の感じ方は間違つてはゐなかつた。

彼女が、夫のゐない夫の故郷の山家に住み着く氣になつたもう一つの理由は、次ぎのやうな事
件であつた。それは、その前の秋の或る日、哲太が、珍しく改まつて、併し云ひにくさうに、ま
た宣言でもするやうに、云つた次ぎの言葉である。――

「やはり、君を田舎へ歸さう。どうも、藝術的にも、生活的にも、行詰つてしまつた。今のうち
に、君を田舎の両親に引合しておかないと、將來が不安で居ても立つてもゐられない。たのむ、
田舎の家で、半年なり、一年なり、うまく行けば半永久的に、老父母の世話をしてくれないか。
それから、子供を、――勉吉を、生みの子供と思つて、面倒を見てくれ。さうすれば、君の道も
必ず開けるだらう。もし僕にも道が開けさうになつたら、東京から君を迎ひに行つて、も一度、
新規蒔直しのつもりで、創作に精進したいと思ふんだ。……もし又、どうにも遣切れなくなつた
ら、よく君に話した砂ヶ峠に落ちて行くばかりだ。あそこは父の持山で、僕の家的小屋もあるか
ら、あれを「終の栖」としてもいい。――こんな事を口に出すまでは、僕も考へた上にも考へた
事なのだ、もし君がその氣になれば、來年の正月早々に連れて行かう。何しろ八年の御無沙汰だ
から、敷居が高いが……」

ところが、哲太は、その年の暮あたりから持病が次第に重くなり、長途の旅行が出来なくな
り、到頭その年の十一月下旬に死んでしまつた。が、この哲太の無意識の遺言になつた言葉は、
彼自身はそれを實行できずに死んでしまつたが、みちよにそれを押附けるやうな結果になつたの
であつた。――

今、この哲太の父の秀松の言葉と哲太の無意識の遺言になつた言葉を並べて見ると、ずつと若い時分に哲太などと一緒に佛教に少し關心を持った事のあるみちよは、哲太が三百里離れた所に住んでゐる父の心を感得したのか、秀松が死んだ子の心を感得したのか、などと考へて、氣味悪くなり、この父と子の執念で此の家から一生離れられないか、といふやうな氣持になつた。さう考へると、みちよは好い氣持がしなかつた。併し、それは諦めるより仕方がないと思つた。

その晩、食後、みちよは、十六歳の小學生である勉吉と、二人きりで、彼女の居間で、火鉢を挟んで向前に坐つた時、ちよつとの間、二人とも堅くなつて、息の詰まる思ひをしたが、突然、勉吉が

「母ちゃん、こんな田舎、好き？」と云つたのが皮切となつて、二人は、五分と立たないうちに、母と子といふやうな堅苦しさがなくて、而も母と子らしい親しい氣持に打解けた。かういふ氣持は、幼い時に生みの母が他家に嫁いだ爲めに母の愛を知らずに来たみちよにも、八年間祖父母の家に育てられて、母の愛を知らずに来た勉吉にも、生れて初めての経験であつた。彼等は、親子とか、男女とか、老若とか、一切の差別を越えて、話し合ふやうな氣がした。が、彼等は、さう

いふ理窟なしに、生れて初めて『知己』に會つたやうな氣持になつた。心と心とが合つた。併し、彼等の間に交された會話は至つて平凡なものであつた。

「父ちゃんが亡くなつたのを悲しいと思ふ？」

彼は頷いた。が。直ぐ、

「あまり長い間會はなかつたので、悲しいといふ氣持がよく分らない、」と云ふ意味の事を土地の言葉で云つた。

みちよが直ぐ返す言葉が出ないので黙つてゐると、勉吉は

「父ちゃんが死んで、一番悲しいと思ふ事は、東京へ行けなくなつたことだ、」といふ意味の事をこれも土地の言葉で云つた。

又も、みちよは返す言葉が直ぐ見つからなくて困つた。と、今度は少し間を置いて、勉吉は、
「母ちゃん、もう東京へ行かないの？」といふ意味の事をこれも土地の言葉で云つた。

その翌日、日曜日だったので、みちよは、勉吉に案内されて、家の中の要所を廻つた。彼女の居間に當てられた佛間から濡縁づたひに歩いて行くと、左側は荒れ放題の冬枯れの庭で、右側は

三つの座敷が竝んでゐた。どういふ譯か、その三つの部屋の障子は悉くはづされ、疊がすつかり上げられてあつた。部屋の中には薄日が射してゐたが、洞穴のやうな寒々した感じがした。よく見ると、久しく使つたことがないらしく、襖の書畫は雨漏の染の方が却つて何かの繪模様のやうに見え、長押や欄間は、鼠の齧るに任せ、蜘蛛の巢の蔓延るままにされてゐた。哲太から聞いてゐたのでは、土藏があつたり、牛小屋があつたり、池があつたり、腐つても田地五町山林十五町持つてゐる、といふのであるから、もつと増な家か、とみちよは空想してゐた。現に昨日日驛から舅と一緒に自動車で来た時、自動車が家の近くまで来た時、「おお、爽ましたぞ、あの山の裾の、石垣の上に立つてゐる、さう、白壁の土藏の見える、あれが家ぢや」と舅が云ふので、自動車の窓から眺めた時は、なるほど、哲太がときどき自慢してゐた程ある、山家としては立派な家だなと彼女は心強く思つたものであつた。それが、内に入つて見ると、土藏の壁は落ち、池には魚らしい魚は一尾もゐさうにない。これは、みちよでなくても、誰が見ても、見るもの悉く、没落に傾いて行く家の象徴ならぬものはなかつた。みちよは、この家に自分を連れて行つて、この家に自分を置而行堀にしようかと考へた哲太をちよつと怨めしく思つた。

併し、その翌日から、みちよは、朝、誰よりも早く起きて、食事の仕度をする事が、楽しみの

一つになつた。殊に、日曜日祭日の外は、勉吉の辨當を作る事、そのお敷を考へる事などが楽しみになつた。が、それにつけても、嘗て哲太が書記をしてゐたM町のS女塾で裁縫の教師をしてゐた彼女は、彼女が一番好きな得意の裁縫がこの片田舎では出来ない事を思ふと、むつかしく云ふと、この世が楽しくなくなるのであつた。器量はそれ程いいのではないが、背のすらつとした、色白で、所謂女らしい型で、この山里に置くと、目に立つた。そんな事も、日が立つに連れ、彼女の氣持を、ときどき苛々させた。ところが、朝、勉吉が、彼女の居間の庭の隅に置いてある自転車を、わざと其處から乗らずに、庭づたひに玄関前の往來まで右手で引いて行く、みちよは自転車の右側を歩いて行く、ちやうど一臺の自転車を左と右から護衛して玄関前まで送つて行くといふ恰好。その玄関口の前から、勉吉はひらりと自転車で乗つて、家の前の坂道を反身になつて下つて行く。それが小學生騎士のやうに見える。彼女は、崖の上になつてゐる路傍に立つて、それを見送る。自転車が、松林に入つて暫くして出る。彼女はそれが山の裾を曲つて見えなくなるまで見送るのであつた。嘗ての日、哲太と諍ひをする種の一つに、哲太の離縁になつた先妻をM町で一度ちよとみちよは見たことがある、その時の印象を彼女が何時も持出して女役者のやうだと貶すつもりで云ふと、哲太は向きになつて怒つた。その頃、みちよは、舅から送つて来た勉吉の

寫眞を初めて見た。それを見ながら、哲太に「あなたにちつとも似てませんね、色の白いところ、口元の可愛らしいところ、お母さんそっくりですね」と云つた。それは、容貌など少しも氣にしないやうに見えて氣にするところの哲太の痛い所を突いたので、終に取組合の喧嘩までしたことがあつた位である。が、今は、勉吉の顔と彼女の顔が眞の親子のやうに似てゐる（これは半分は本當）と云つた秀松の言葉を信じてゐるので、勉吉の顔が先妻に似てゐると云つた事から大喧嘩した事などの思ひ出はすゐぶん遠方へ行つてしまつた。

一週間程たつて、やつと東京からの鐵道便の荷物がとどいた。鐵道便の荷物と云つても、主な物は何といつても本で、これは玄關に置き放しにして、入る物だけを残して、後は藏にしまふことにした。みちよの部屋に入れられるものは、一段しかない硝子戸の附いた古い本箱、三段組の貧弱な書棚、小さな經机、牡丹に唐獅子の模様のある伊萬里焼の小さな火鉢、南部の鐵瓶などで、これ等は、みちよと哲太が、八年ほど、東京で貧困な生活をしてゐる間に、一つ一つ古道具屋から買ひ集めたものである。この外に、裁縫だけでは、一層困つた時の役に立たないから、と云ふ哲太の意見で、東京で半年程づつ習つた琴と三味線があつた。これは、田舎に行けば必要がないか

ら賣つてしまはうと云ふみちよの意見だつたのを、をんな氣のない田舎の家の色取にもなり、寂しい時のみちよの慰めにもならうから、といふ秀松の意見で、鐵道便に托されたものであるが、みちよの居間に當てられた佛間には置き切れないだらう、といふので、秀松の居間に置かれることになつた。

硝子戸の附いた古い小さな本箱、三段組の貧弱な書棚、小さな經机、小さな火鉢——今、着いた道具類は、何も彼も、皆小さく貧弱であつた。前からある、哲太が十年程前に使つたといふ、大内塗の茶箆筥、立派な紫檀の机、大きな支那火鉢——皆大きくて立派であつた。みちよは、大きな立派な道具の中に、新來の小さな貧弱な茶道具を、恰好よく竝べるのに、あれもいけない、これも工合が悪い、といふ風に、何度飾り付けを變へて見たか、數知れぬ程であつた。併し、幾ら場所を變へ、道具類の向きを變へても、六疊の部屋では、どうにも手のつけやう飾りやうがない。さうして、やつとのことで、程合の場所らしい場所に飾りつけて見た。ところが、立つて見たり、坐つて見たり、離れて見たり、近づいて見たり、したが、何か落着かない。それは、大きいとか、小さいとか、立派とか、貧弱とか、いふのではなく、何か、性の合はないもの同士が、何か悪い因縁といふやうなもので、結びつけられて、この部屋に同居してゐるやうに、みちよに

は思はれるのであつた。さう思ふと、彼女自身も、その何か悪い因縁で、これ等の古參新參の道具類と結びつけられてゐるやうな氣さへするのであつた。さういふ風に考へると、彼女は、彼女をかういふ山家に連れて來た哲太を恨めしくさへ思ふのであつた。

その日の午後は、十二月には珍しい暖い陽氣であつた。

その前の日に、哲太の墓が出來あがつた。墓地は、木原の家のある山の反對側の背戸山にあつた。その山の頂上に、三體の地藏菩薩の石像がある。その傍に、哲太の兄と、弟と、妹との墓がある。山にかかると、道が狭いので、墓に參るのに、人々は一列にならねばならなかつた。

秀松、菊、勉吉、みちよ、その外に、ちようど彼等が家を出ようとする時、故郷のF縣に歸る途中、Mを通つたので、急に思ひ立つて、そこで汽車を乗換へて、木原の家のみちよを訪ねて來た、哲太の先輩であり、文學的にも生活的にも哲太を援助した横谷が従つた。

その時以來、哲太の毎月の命日には、この、秀松、菊、勉吉、みちよ、——この四人が哲太の墓參をするのが習慣になつた。

その翌年の五月に、みちよから横谷に宛てて次ぎの二通の手紙が來た。

「(前略)、今、子供がMへ行きますのを(四月からM町の親戚から中學に通ふことになりました)家の前の崖に立つて見送り、子供の自轉車が山に添つた曲り道から見えなくなりますと、私は急に淋しくなりました、涙ぐんで、家の中に入りました。たつた一人きりの廣い家の中で私は強く押し寄せてくる悲しみに思ふ存分泣きつづけました。

木原なき後、その悲しみにも、周囲のすべての氣まづさにも堪へて、どうにかその日その日を引きづつてまゐりましたのも、子供に芽生へた私の母性愛でございました。私はいろいろの意味で、又、自ら愛さずにはゐられない私の母としての愛情から、子供を強く愛してゐます。子供も素直な氣持で私に懐かしんでくれてゐました。私はこれによつてどんなに悲しみから救はれてゐましたことか存じません。それが近日子供の肉身のもの(子供の生母の弟)からその純な子供の心をすつかりぶち毀されました、あまつさへ今度中學への入學を機に私達の手から奪ふやうにして引きとつてしまひました。その際その親戚の人々が私に與へました侮辱は、私は今にして受ける正しき制裁だと存じまして、誰をも恨まずじつと胸を押へて居りますけれど、折角素直になつて

おました子供の心底に反逆心を植ゑつけられましたことは、自然なこととは申せ、悲しみに堪へません。

「然しこれはいつかは起る問題だつたかも知れません。

「私はただ人並以上の強い強い愛着心を持った私の悲しき性格をしみじみ不幸だと思はせられます。

「一つの大きい木を折られ、その下から芽生へた二葉を又、摘みとられて、通り魔のやうに過ぎしこの一年半の子供との生活を淋しく振り返つてゐます。私にはどこまで参りましてもやつぱり孤獨の道よりないのでございます。さう断念いたしてゐますから、傍の子供の置いて行つた机などを見ますと又、私の悲しき性格が苦しませます。」

〔前略〕、この月の十二日子供が身を寄せてゐます親戚（いつか申上げました子供の叔父の家でございます）で突然發病いたし、その病氣が急性肺炎と脳膜炎とでございましたので、大變苦しみつげ僅か一週間もたたない内に亡くなりました。いくら思つてみましても、あきらめきれませんことは、その親戚の人達が最後まで私に子供の看護を許さなかつたことでございます。私

は子供を亡くした悲しみと同時にその人達を恨む心を押へようとしてとても苦しみました。冷いからだになつて家に歸りました時私は初めて誰はばかり思ふ存分抱いてやりました。正しい立場ではございませんけれど、假にも母として二年近くも一緒に生活いたして來ました私が、その子供の看護を拒絶されて泣く泣くそれをどうすることも出来なかつたこの度の悲しい出來事——私はもうそんなことを思ひ出し度くございません。子供はきつと私の心を分つてゐてくれたことと存じます。私にも子供の心はよく分つてゐます。その叔父なる人（子供の母の弟）の私への復讐のために私と子供の間は悲しき別れをいたしました。然し、私は誰をも恨まず、ただ自分の宿命といたしてあきらめたいと存じてゐます。子供が病床にて熱に浮かされながら、「Hの家へ連れて歸つて、杖に縋つてでも歸りたい、」と云つておぢいさん（木原の父）をせがんで困らせたといふことを父から聞かされました。

「私は何事も宿命といたして無理にもあきらめようと（その親戚の人達の態度を）つとめてゐますけれど、あのいたいけな子供の心を私とその親戚の人達との間に入れて痛めさせましたことがかはいさうでなりません。

「骸となつてHの家へ歸つてまゐりまして、初めて私の自由を許されました子供に對して、私

は思ふ存分切ない愛を興へてやりました。私が抱いてお棺に納めてやり、私の拵へてやつたかばんや、筆入や、買つてやつてまだ子供に見せてゐなかつた雑誌など、お棺に入れてやつて合掌いたしました時を私はせめてものあきらめといたしました。きつと子供もそれで満足いたしてくれたことと存じます。

「父（木原）の側に抱かれるやうにして埋められた子供のお墓におまゐりいたす度にその二人の傍にゆかれる自分を待たれるやうな思ひがいたします。

「十七歳といふ短い生涯の間、満足に親の愛を受けることの出来なかつた子供へ私はその罪を詫びずにはゐられません。木原と私との悲しき業報とは申せ子供に對してあまりに濟まないことでございます。

「この度親戚の人達から受けた悲しき態度も私の過去に對しての當然受けるべき制裁だと存じまして誰をも恨まれなくなつて來ます。ただその罪にうなだれるのみでございます。

「七十三歳といふ年をとつた父が子（木原）を亡くし、又、孫を失つて、悲歎に暮れてゐるその顔を朝夕みる度に胸が痛みます。木原に代り子供に代つて悲しきこの父を慰めずにはゐられない氣持がいたします。

「子供が亡くなりましたして、十三日たちました。悲しみは日をおうて加つて參ります。然し今は自分の悲しみを無理にも押し包んで、年老いた父たちを慰めることに一所懸命で御座います。日の落ちかけた細い野道を父と母と私と三人が一列になつて毎日子供の墓に參りますとき、いひしれぬ感慨に迫られます。

いつかは木原の墓參りに子供を入れて四人で、かうして一列になつて通つてゐたこの野道を、などと思ひながら。

夢

の

跡

今度の大阪行きに、中央線をえらんだのは、ふとした事から、名古屋の岩木と美濃大井町の田澤が、殆ど同じ頃に、今度關西の方に旅行する時は必ず訪ねてくれと云ふ手紙をよこしたのが元であつた。それで、美濃大井町に行くには中央線がいい、とすれば、十月二十五日に岐阜から飛驒高山を経て富山に出る鐵道が開通する、その線で高山にも寄らう、名古屋に行くのに少し廻りになるが、その代り諏訪にも一泊しよう、さうしたら日野春あたりの景色も見られる、と、かういふ風に指を折ると、それ等に關係して、唯の訪問、唯の見物でない、いろいろ得のある旅行が出来るやうな氣がしたからである。で、十月二十九日、午前八時三十分、新宿を出る汽車で立つた。

中央線で長い汽車に乗るのはずぶん久しぶりであつた。尤も、中央線の長い汽車と云つても、十五六年前に初めて諏訪へ行った時以來、行先は殆ど諏訪ときまつてゐた、一二の例外はあるが。現に、その後、十三年前に有川と一度、市木と二度、この汽車に乗つた時も、みな諏訪であつた。その市木と行つた時以來であるから、つまり十二三年ぶりになる譯である。その頃の中央線は飯田町驛から出た。いふまでもなく、その頃は、まだ新宿甲府間に電氣機關車など通らない時

分であつたから、飯田町から諏訪まで十時間ぐらゐかかつた。その代り、飯田町を、夜の十時頃に出ると、朝の五時頃に日野春あたりを通り、朝の十時頃に立つと、夕方の五時頃に日野春あたりを通つた。由比が、ときどき思ひ出し、今も思ひ出したのは、彼が十五六年前に一人で諏訪へ出かけて行つた時に見た、朝と夕方の、日野春あたりの景色である。

由比の氣に入つた日野春あたりの景色といふのは、——汽車が、甲府を過ぎ、龍王、韮崎、と西北に進行する途中、左手に、甲府盆地の遙か彼方に、前山越しに、大空を二つに仕切つたやうに、遠望された白峰三山が、いつの間にか、あの見事な段階状の雪山の姿を隠し、やがて、汽車が、韮崎、穴山、日野春、と西北北に爪先上りに登つて行くと、左手に可なり大きな深い溪谷が展開する、その溪谷の裾を釜無川が流れてゐるのが遠く見える、ところが、汽車の通つてゐる所から釜無川の此方の岸までは、段々畑もあり叢もあり所々に人家などもあるから、謂はば天然の大きな箱庭風の土手のやうなものであるが、釜無川の向岸は、釜無川に仕切られた向岸は、もう深い溪谷でもなければ、大きな土手でもない、いきなり、怪奇といふか、豪壯といふか、雄偉といふか、兎に角、嶮岨そのもののやうな山が、殆ど麓から頂上まで剝出しに、幾らか傾きかかつてゐる棒を立てたやうに、聳えてゐる、これが全山まつたく花崗岩塊から成立つてゐると云はれ

る、甲斐駒ヶ岳である。——ざつとかう景色が、夕日の光、朝日の光に依つて、神秘に見えた時を云ふのである。併し、由比は、十二三年前に書いた、彼の文章の中で、「甲斐駒ヶ岳は三千メートルに垂んとする山である。汽車の窓から見ると、この山の後或ひは後左手に、三千メートル級の山々の頂が、別々の氷の塊のやうな色をして、すすくと兵隊のやうに競ひ立つて見える、鋸岳、仙丈ヶ岳、朝與岳、鳳凰山、地藏岳、薬師岳、などの山々であらうか。その他、私の目の前にこの山（甲斐駒ヶ岳）を先頭として、夕日を背にして、奥へ奥へ、西へ南へ、とつづいてゐる山々は本州第一の白峰赤石兩山系の山々であらう。が、その時、私の目は、ときどき他の山々に目移りはしたが、絶えず、その全山を私たちの目の前に露出してゐる、あの驚くべき駒ヶ岳にかへつて来た。駒ヶ岳は恰も舞臺に出てゐる團十郎のやうに見えた、他の諸々の山は悉く彼の影に消されて、ひとり彼だけが、駒ヶ岳だけが、観客の目を引く如きものであらうか、彼は、その麓を釜無川に洗はれながら、一萬尺近いその異様な塊を、根元から私たちに露出して、最早肩の上から雪を被つた歪な頂は、恰も、隣國信濃の國の山々を覗きこんでゐるかとも見えるのである。」と述べてゐる。十二三年前といふと、彼が三十二三歳の頃であるが、日野春あたりの景色の、この誇張された印象を、十四五年の間一度も見なかつたからでもあらうが、四十四歳の秋の一日、十

四五年ぶりで、日野春あたりの景色を、まのあたりに見た瞬間まで、由比は持ちつづけてゐた。十月二十九日、午前八時三十何分、新宿を出た汽車は、ちやうど晝の辨當を買ふ時間頃に、甲府に著いた。汽車が甲府を出ると、由比は、讀みつづけてゐた本を閉ぢて、始終窓ガラスに顔を寄せながら、窓外の移りゆく風景を、見迎へ見送りした。ところが、あいにく、秋にしては珍しく冴えない日和で、さすが山國だけに、甲武信岳も、國師岳も、金峰山も、それと指さすことが出来、又、北岳、間ノ岳、農鳥岳、鹽見岳、上河内岳、惡澤岳、赤石岳、聖岳などの、所謂南アルプスの主峰が、彼方の大空を仕切つてゐるところは、さすがに見事であつたが、折角のそれ等の山嶽の眺望も、赤茶けた正午の日光が、平板に見せた。やがて、葦崎を過ぎて、汽車は次第に上りにかかつた。間もなく、穴山も過ぎた。「さあ、いよいよ來たぞ、」と思つて、彼は再び窓外の移り行く風景を見迎へ見送りした。ところが、今度は午後一時の日光になやまされた。その邊では汽車が進行の方向をしばしば變へるので、その度毎に席を左右に變へたり、鎧戸を上げたり下げたりしなければならなかつた。それに、山々にまだ雪が積つてゐなかつたのと、午後一時の白茶けた日光のために、花崗岩から成立つてゐる甲斐駒鳳凰山塊のやうな峻峰ぞろひの山々が立體的な感じがしなかつた。十三年前に團十郎に擬へた甲斐駒ヶ岳までが、間近に見えるだけ、

それだけ、あの怪奇な、雄偉な、豪壯な感じを、白茶けた午後一時頃の日光に剝奪されてしまつたやうに見えた。併し又、十五六年前に見た朝と夕方の甲斐駒ヶ岳の素晴しさは、十五六年前の夢で、十五六年後の今日、午後一時頃の日光でなく、朝か夕方かの光の中に甲斐駒ヶ岳を置いて、十五六年前と同じ夢と感激が得られるだらうか、と由比はふと疑問のやうに考へたが、直ぐやつぱり得られるだらうと考へた。

由比が諏訪に一泊しようと思つたのは、十五六年前に片戀をした女に、もし會へれば、と思つてみたのである。女は藝妓であるし、それに、感情を悪くした事も、迷惑をかけた事も、不義理をした事も、全くないのであるから、「もし會へれば」などと考へる理由は一つもないのである。十五六年前と云ふと、彼が二十八九歳、彼女が二十一二歳の頃である。彼が初めて諏訪に行つた時、或る晩、宿屋の番頭に、二三日前に出た妓があるから、と進められて、呼んだのが彼女である。藝名を鮎子と云つた。彼は十日ほど滞在した間に彼女を三度か四度ほど呼んだ。或る日、宿屋の番頭が、鮎子の話をした時、ふと、一年ほど休んで居りました、と口を迂らした。その晩、彼が彼女に會つた時、遠廻しの言葉で、赤ちゃんは男か女かと、聞くと、彼女は、ちよつと意外

な顔をしただけで、直ぐ、男の子です、と答へた。由比は、小説を書き始めたばかりの頃だが、早速、鮎子をモデルにした小説の中に「藝者ゆめ子はその時二十一歳であつた。顔は幾らかしやくれ顔で、色は黒いかと思へる、お世辭にも美人とは云ひにくい、顔を始終俯向き加減にしてゐる、口数は少ない、髪の毛は少しくせがある、結ひたての時でも、島田の髻がいつでも心持ち投げやつたやうに見えるのさへ、氣に入つたことであつた。鼻筋が薄く鼻全體が小さ過ぎ、口の邊が少し不釣合ふつあひにふくれてゐて、目に立つ二三本の金齒くわんぢの外ほかに二三本の味嚙齒あじぢさへあるのだが、それさへ氣に入るのである。」といふ一節がある。

由比は、決して消極的な性質ではないが、男女に拘らず、人との交渉は、消極的にならない範圍で、病的と云つていいほど積極的になれない性質であつた。彼が、鮎子と二三度會つてゐるうちに、片戀と極めてしまつて、片戀を扱つた數篇の小説を書いたのも、その性質の一つの現れと見ることが出来るだらう。又、一二ヶ月前、信用の置ける知人から、彼女が、しばらく休んでゐたが、半年程前から、夢三の名乗つて出た、と聞いてゐながら、「もし會へたら、」などと云ふ考へ方もその性質の他の現れと見ることが出来るだらう。又、彼女の今度の藝名の「夢三」と云ふのは由比が彼女をモデルにした小説の中で彼女の名に使つてゐる『ゆめ子』の『夢』と、由比の名『祐

三』の『三』を合した、といふ事を、同じ知人が彼女にお座敷で會つたとき聞いた、と云ふ話を信じながら、而もこの二つの話から今度上諏訪に寄つてみる氣になつたのにも拘らず「もし會へたら、」など云ふ考へ方も、その性質の別の現れと見ることが出来るだらう。――

上諏訪に著いたのは午後二時だつた。市木と二度泊つたことのあるみづうみ館に行つた。着物を着かへない前に、時間表を調べて、大井町の田澤に「アスゴニジハンツク」といふ電報を打つた。上諏訪に下りたのは、前に述べた通り、「もし會へたら、」夢三に會ふこと、十二年ぶりに町を散歩するぐらゐの當あてだつたので、彼はちよつと時間を持てあました。が、温泉にはひつたり三四枚の繪葉書を書いたりするうちに、ぼつぼつ散歩に出かけてもいい時間になつた。散歩に出るまでは殆ど思ひ出さなかつたが、湖のほとりを歩いてゐると、やうやく忘れかかつてゐた市木が櫻の花の咲く前に死んだことを思ひ出した。市木と一緒にこの湖のほとりを散歩した頃は、市木が二三年も一所懸命にやつてゐた出版に失敗に失敗を重ねて、苦勞と煩悶と迷ひと、そんな有り觸れた言葉で云ひ盡せない心身の苦難をしてゐた頃であつた。學生時代から減多に物を云はないと云ふ性質で目立ち、後に高名な文學者になつてからは餘り物を云はな過ぎるといふ事だけで怪物扱ひにされたり恐持こもてした市木が、みづうみ館の裏の湖のほとりから公園の入口の並木町まで凡

そ五六町ほど歩いた間に、突然、

「なるほど、……泣かぬ辨慶も泣く時があるなア、」と云つた。それが餘りに突然だつたので、由比は、唯、

「うん、……」と無意味な返事をした、と云ふより、唯、さういふ聲を發音した。が、それ切り市木は、元の無言に戻つて、連があるのを、知つてゐるのか、知つてゐないか、分らないやうな恰好で、歩きつづけた。由比も、市木と一緒にゐる時は、市木に負けないほど、物を云はないのが常であつた。尤も、彼等と一緒にゐる時の口數を勘定したら、由比の方が幾らか多かつたが、由比は、相手が話手はなしての場合は、聞上手と話上手を兼ねることぐらゐは出來た。が、市木と一緒にゐる時、市木と同じ位の無口になる事は、由比にも無口の傾向があるから、少しも苦にならなかつた。この點でも、由比と市木とは、馬が合つた。並木道に出ると、彼等は、無言のまま、右の方へ歩きつづけた。その無言で歩きつづけてゐる間に、由比は、ふと、今、市木が突然云つた、「泣かぬ辨慶も泣く時があるなア」と云ふ文句は、その時から二年程前、彼が『ゆめ子』を題材にして書いた幾つかの片戀小説の中の一節である、『一と踊』といふ小説の中の一節である事に気がついた。それは「どんな男にも、どんな女にも、色色違つた面があるものである。それが白と黒

と、程の違つた面でも、その白もその黒も偽ではないところの人間の一部分なのである。例へば一人の辨慶が泣く辨慶になつたり泣かぬ辨慶になつたりする事は、それぞれ皆人間の自然なのである。つまり私もすゝむぶん悪い男であり、その子持藝者も案外だらしない女であるかも知れないが、神様の覺召しか或ひは彼の悪戯か、私は彼女と組合はされた場合、お雛様のやうに二人は向ひ合つて、處女のやうに二人は話し合ふのである。——何處を見ても、いつの所も、何とも早や淺ましい、嫌なことだらけの世の中である。私とあなたで夢のお伽話をこしらへませうよ。とまあ斯ういふ譯なのであつた。」といふ所である。この一節を思ひ出して、由比は「さうだ、市木といふ男は知らぬ人には誤解されてゐるが、かういふ一節を愛讀する性質がある、」と考へた。——

大正十二年の二月の半頃なかばだつた。由比と市木は同年で三十三歳だつた。可なり寒い日だつた。

「この並木は、みんな櫻だな、」と由比が云ふと、今度は、市木の方が、

「うん、」と云つた。併し、この『うん』は、由比に、何か呻くうな聲のやうに聞えた。

やがて並木道が盡きると、道は、狭くなり、自然に、右に曲り、それを二三間げんゆくと、また自然に、左に曲る、その道がすつと高島公園につづいてゐる。初めの曲り角をまがつた突當りに、古風な黒塀と黒木の門を持つた遊廓がある。その扉のない黒木の門の中には、よく田舎の大百姓

の家にあるやうな、がらんとした庭があつて、その奥に、これも、古風な千本格子の二階建の家が二軒と、やはり千本格子の平家が五軒ならんでゐた。「知らなかつたら、遊廓とは見えないね、」と云ひながら、彼等は、當なしに、公園の方へ行く道を、文字どほり黙々と歩きつづけた。道の片側の溝川は湯氣を立ててゐた。天然の温泉が流れてゐるのである。道幅が狭かつたので、この時の散歩は、彼等としては、可なりいろいろの話を交した。この時、市木が話した話の中で由比の頭にいつ迄も残つてゐるのは、――

「僕は、自分も浮氣をしない代り、浮氣をする女は、どんな美人でもどんな賢い女でも、戀人にするのは嫌だ。」

「僕も殆ど同感だ。」

「しかし、僕より、君の方が、幾らか寛大だらうと思ふ。僕は、どんな戀人でも、浮氣をしたら、絶対に許せない。……ここが高島公園か。神武天皇の第二皇子を、祖先に持つてゐる諏訪氏の居城の跡としては、少し貧弱過ぎるな。……」

後の方の言葉は獨言のやうに云つて、市木は、通りがかりのベンチに、體を投げ出すやうに腰かけた。由比も、少し離れた所に、腰を下ろした。

「僕は、長年連れ添うてゐる女房でも、……そんな場合は……直ぐ離婚しないとしても、……離婚したのと同じ生活をする、同じ家に住んでゐても、……」

話手の市木は、片手を懐手にして、片手を膝の上に置いてゐた。聞手の由比は、腕組をしてゐた。向うに見える湖水は鉛色をしてゐた。

「……その外の事は、女房が、年上でも、出しや張りでも、何でも、僕は、ちつとも苦にならな
い、……僕は、ほんとに思ふ女が、一人あつたら、……それでいいな。……」

「あるのか？」

「ふん。」

「僕はよく知らないが、あの有川か、金山かが知つてる、……大阪の何とかいふ？」

「ふん。あれは一寸……」

「あれは一寸……どうしたんだ？」

「……あれは、もう、仕舞だ。今のは、まだ寫真だけなんだが……」

「寫真といふのは變だね、……君に似合はないぢやないか。」

「……二年程前『ウイクリイ』の表紙一ぱいに寫真が出た女だ。」

「ぢや、會つた事はないんだね。」

「ふん。」

それは、非常に寒い、と云ふより、この地方の言葉で云ふと、非常に凍みる日であつた。その上、この地方の名物の八ヶ岳嵐が吹いて來た。二人はベンチから立ち上つた。市木は兩手を懐に入れた。――

由比は、並木道まで出て見たが、十月末の夕暮の薄暗い並木道は、兩側にカフェーや安宿やが散在してゐるのが、並木の間から見えたりして、變に佻しく味氣ない感じがした。裏町でも、と思つて、足に任して歩いて行くと、ふと見覚えのある劇場の前に出た。どういふ譯か、その劇場の前に、劇場そのものの敷地より大きな、こぼこの廣場があつた。而もその廣場には何も置いてなかつた。十四五年前の十一月の初頃、由比は、有川と今の夢三と三人、下諏訪から自動車で此の劇場へ活動寫真を見に來た事があつた。――が、それは、その前の年、市木の主催で、大阪に文藝講演會が開催された時のことである。その講演會に出たのは、當時中堅新進作家達の中の花形と稱された、石村、金山、余田、有川、由比等であつた。二日間の講演會が終ると、由比と有川は、

大阪に居残ると云ふ他の連中に別れて、途中、京都で一泊し、京都から名古屋乗換の中央線で、下諏訪に來た。その時の事である。――彼等が、わざわざ下諏訪に廻つたのは、由比は、彼の片戀の女を見るため、有川は、由比がその頃頻りにその女を材料にした小説を發表してゐたので、その實物を見てやらうと云ふ都會人獨得の好奇心と、由比がその小説の中でその女主人公ゆめ子の顔をダンテロゼツテイの描く型と形容してゐるので、さういふ型の女性に有川自身興味を持つてゐたからである。彼等が下諏訪に來たのは、當時、鮎子と名乗つてゐた夢三が下諏訪にゐたからである。彼等は、その晚つれづれの餘り、活動寫真を見に、下諏訪から上諏訪の此の劇場までドライブさせたのであつた。寒國の十一月半の夜、田舎の幌のぼる自動車で、而も大部分湖水沿ひであつたから、鮎子の中に挟んだ二人は、可なり寒い思ひをした。その自動車の中で、由比は、ふと有川が二つの女性の型――クラシックな顔（由比の言葉に直すと三十六相そろつた顔）と、ロマンティックな顔（由比の言葉に直すとデッサンの崩れた顔）――が好きだ、と云ふ事を思ひ出した。さうして、若しや、と案じたのが、案外、有川が鮎子にわりに好意を持つたらしいのは、彼女の顔が後者に屬するからだ、といふ結論に達した。ロマンティックな顔といふと、さうだ、あの……と由比は思ひ當つた事があつた。が、その事は後で述べよう。――

炬燵に當りながら活動寫眞を見るといふ事が、有川を非常に喜ばした。寫眞の切れ目毎に、彼は、彼獨得の鼻にかかる聲で、「炬燵に當つて映畫を見る、亦樂しからずや、と云ふのは、どうだ、」とか、「方々持ち廻つて古びた寫眞は、グロテスクな所があつていいね、」とか、云つた。さういふ事を一言いふ度に、彼の目は如何にも茶目らしく活躍した。茶目、と云ふと、由比は、後で氣がついたのであるが、有川のやうな才人が、その晩、「炬燵に當つて映畫を見る、といふのは、君、發句にもならないね、」と云ふ言葉を幾度もくり返した、それで氣をつけてゐると、有川がその言葉を云ふのは必ず場内が暗くなる時で、それと一緒に有川が炬燵の中に手を入れる事であつた。由比は、炬燵が嫌ひだつたので、初めから炬燵に一度も手を入れなかつた。鮎子は、元もと冷性であつたから、初めから仕舞まで、炬燵に手と膝を入れてゐた。有川は、「炬燵に當つて映畫を見るといふのは、君、發句にならないかね、」と云つた時毎に炬燵に手を入れた譯である。結局、「君、發句にならないかね」と呼びかけられた由比は、由比に使はれた譯である。有川は、小説家であつたが、發句も嗜んだ。由比も、小説家ではあつたが、發句の心得はなかつた。

由比と有川が、大阪から下諏訪に来る途中京都に寄つた事は、前に述べた。彼等は、由比の中學同窓の日本畫家を、京都へ來たついでに、高島屋に訪ねて行つた。彼等はまだ若かつた。由比は三十歳、有川は二十九歳であつた。畫家に別れて、彼等が高島屋の店の中を何氣なく歩いてゐた時、ふと由比が、安物の毛皮の加工品の陳列場の前に立止つて、裏に兎の毛皮を附けた赤坊用の袖無を買つて、それを諏訪の鮎子に送らせる注文をした。と、直ぐ隣に、女のショウルの賣店があつたので、由比は、有川に、「君、あの人に、送つてやつたら、どう」と進めた。有川は、ちよつとの間、思案をしてゐる恰好をしてゐたが、直ぐ「うん、さうしよう、」と云つて、これは奈良の鹿子といふ藝妓に送らした。赤坊の袖無は金拾貳圓で、鹿子のショウルは金參拾圓であつた。この鹿子の顔が、鮎子と顔立は全く違ふが、ロマンティックであつた。彼等が鹿子を知つたのは、その日から三日前であつた。大阪の文藝講演會の第一日が終つたのは午後九時頃であつた。その晩、市木が、奈良に行かないか、と云つたのに應じたのが、由比と有川で、他の連中は、大阪の茶屋の方を好んで應じなかつたのである。市木は、明日の講演會の準備があるから、と云つて、その晩おそく大阪に歸つた。その晩、有川の部屋に鹿子が來て、由比の部屋には、笛子といふ鹿子の朋輩藝妓が現れた。笛子が現れた時間が餘り過ぎたので、寢付の良過ぎる由比は翌朝になつて、昨夜深更に笛子が部屋の入口まで現れたと云ふ話を聞いたのであつた。さういふ譯で、朝

飯の時、由比は有川の部屋に行つて、鹿子と三人で朝飯を済ましたのであつた。後日になつて考へると、後日、有川が鮎子に好意を持つたやうに、由比は鹿子に好感を抱いた。鹿子も由比に好意を持つたらしく、「あんた、起きなかつたんが仕合せやつた、笛子はんに、あんたは勿體無過ぎる」といふ意味の言葉を、半分名古屋訛の入つた文句で、述べた。由比が「君の言葉は半名古屋だな」と云ふと、鹿子は生れは名古屋だが、奈良へ来る迄、飛驒の高山にゐた、と答へた。すると、傍から、有川が「飛驒の高山は君向きだね」と云つた。朝飯後、由比は、持參の小寫真器で、有川と鹿子と彼自身と三人一緒に竝んだ、寫真を取つた。由比は、今でもその寫真を所藏してゐるが、何分十四五年前の事であるから、どうして有川と鹿子の中に自分が入つてゐるのか分らない。兎に角、その寫真を取ると間もなく、由比と有川は大阪に歸つた。

市木が講演者たちの宿舎に當てたのは大阪の堀江の茶屋であつた。第二日の講演會は午後五時から始まるのであるが、午後一時に起きてゐたのは、由比、有川、金山の三人だけで、他の連中（市木もその一人）は皆寝てゐた。二時頃になつて、この三人のほかは、余田、市木が同じ部屋に、顔を現した。午後二時頃は茶屋も茶屋町も實に閑靜であつた。五人が車座になつて、四方山話をしてゐると、階下から、ウン、スン、ウン、スンといふやうな掛聲をしながら、階段を上つ

て来る氣色がした。ウン、スン、ウン、スンと云ふのは、二人の仲居が、息急く呼吸であつた。やがて、二人の仲居が、手に手に、相撲取部屋へでも置くやうな大きな盆に、一つは菓物を、一つは菓子を盛つた盆物を持つて上つて來た。

「そんなもの注文しないよ、」と市木が云つた。

「いえ、贈り物です。」

「誰に？」

「有川先生。」

「ちえッ！」有川は唸るやうに云つた。それと殆ど同時に、もう一人の仲居が「別嬪さんだつせ、」と云つた。

「なにッ、別嬪？」と余田が云つた。別嬪と聞くと、由比は直ぐ有川の顔を見た、直覺的に。が「それにしても？」と由比は思つた。

有川の顔は青ざめて見えた。

「名前は何ちふんだ。」と金山が持前の甲高い聲で云つた。

「よしッ！」

それは皆がその顔を見たやうな確りした聲であつた。その時はもう聲の主の市木は、階段の下口まで、進んでゐた。由比がほつとして、有川の方を見ると、有川は俯向いてゐた。

「有川君、ちよつと。今下りて行つたと思つた市木が階段口から首だけ出して呼んだ。」

——これが、由比が、下諏訪の劇場へ行く自動車の中で、「ロマンティックな顔といふと、さうだ、あの……」と思ひ當つた事であつた。——

その晩の十一時頃、並木町の傍の湖畔亭といふ料理屋の一室で、由比は、十二三年ぶりで、夢三と、名物の炬燵を隔てて向前に坐つた。會つてしまふと、立入つた關係がなかつた間柄だけに、二人の話も顔附も、餘り淡々とし過ぎる程であつた。初め、由比は宿の女中に電話をかけてもらった、と、三十分程後に返事の電話がかかつて來た。來る、と云ふのを斷つて、由比は、十時前、この家に來たのである。

「夢三なんて、變だな、やつぱり、鮎子といふ方が、すつといいな、」と由比が云ふと、夢三は、前からの癖で、何も云はずに、俯向いて、口元に微かに微笑のやうなものを浮べてゐるだけであつた。前から、彼女は、少くとも由比の前では、かういふ表情の變化のない女であつた。尤も、かうい

ふ所が、由比の氣に入つたのかも知れないが。併し、その晩の會合は、『片戀の女』などといふ氣持はいふ迄もなく、さういふ言葉の感じさへ、微塵もしなかつた。が、向ひ合つて坐つてゐても、窮屈な氣持とか、不快な氣持とか、あらゆるさういふ物が、何もないといふ感じもあつた。これは片苦しい言葉で云ふと、生身の人間が嘗て互に夢の附合をした、といふやうな所から來るのかも知れない。彼が、文字どほり、十二三年ぶりに顔を合した時、

「ずゐぶんしばらく、」と云つてから、直ぐ「お子さん？」と聞くと、

「死にました、去年、」と云つて、彼女は俯向いた。「死にました、去年、」といふ言葉を發音するだけ口を開く、といふ感じであつた。目に立つ所に金齒が嵌まつてゐるので、「死にました、去年、」と、金齒が、ちらと返事したやうな氣がした位である。

「えッ、幾つ？」却つて彼の方が驚いた顔と聲で云つた。

「じうごでした。」靜かな、悲しみを抑へた、聞く人の心を打つ聲であつたが、やつぱり表情に變化のない人であるから、折角の聲が生きなかつた。

尤も、この、靜かな、高い感情を抑へた、やうに聞える聲は、彼女の持前のやうでもあつた。

由比が、歸る前に、外の寒さが思はれたので襟卷を忘れたことを、後悔したやうに云ふと、彼女は、

やはり同じ静かな聲で、

「およろしかつたら、こどものえりまきがございますから、それをおとりよせたいませうか、」と云つた。この聲を、誇張して、形容すると、うんと工夫して、幽霊の聲色を使つてごらん、女幽霊の、それも、人を恨む幽霊でなく、一切をあきらめた幽霊の氣持を現して、と云はれて、やつと發音が出来る、といふやうな聲である。

「學校、何年だつたの？」

「ちゆうがく、二ねんでしたの……。中學へ參りますのに、親が、こんな商賣をして、居りましたら、と思ひまして、すうツと止めて居りましたんですけど。……。もう死んでしまひましたんですもの……」

「有川のこと、おどろいた？」

「えーえ、おどろきましたわア。」

この言葉は子の死ん話をした時より力がこもつてゐるやうに思はれたので、由比は、幾らか鎌を掛ける氣持もあつたが、十五六年前にやつた彼由比の手紙や葉書を取つてある、といふ事を、何かの時にちらと彼女が云つたのを切掛に、

「有川からの手紙も取つてある？」と聞くと、

「ええ、」と、彼女は例の無變化の表情で云つた。併し、それ以上さういふ事を聞く必要も興味もなかつたので、由比は、

「市木、——君、知つてたね？」と聞いてみた。

「ええ……あの、だまアつてゐる方……。……あの方も、お亡くなりになりましたわねえ……」

ふと、時計を見ると、十二時過ぎてゐたので、由比は驚いて歸り仕度をした。湖畔亭の玄關まで出ると、可なり寒い。女中が自動車を呼ばうと云ふのを斷つて、門を出ると、暗がりの中から、すうツと出て來た女がある。見ると、夢三で、手に子供用のシヨウルを持つてゐた。明日早く立つんだから、返しに來るのが面倒だから、と斷ると、

「ぢやあ、みづらみ館の門のところまで、お送りいたしませう、」と云つた。

二町程あつた、道で珍しく、此方が黙つてゐたのに、それは寒いからでもあつたが、彼女は市木にみづらみ館から呼ばれた事があるといふ話をした。

「やつぱり黙つてた？」

「ええ。」

「恐い感じがしない？」

「……あたし、……あの方……あれで初心な方ぢやないかと思ひますけど……」

「君は案外えらいね。」

「……」何と思つたか、「先生、いい方は、みんな、お亡くなりになりますわね。」と夢三は突然云つた。

「うん……しかし、彼等は皆、一種の強者だつたなア。」

「……」

「君に、いい歌を一つ教へようか。」

「ええ。」

「かたはらに、かたはらに、秋草の花、秋草の花、語るらく、……語るらく、傍らに、秋草の花、語るらく、……分る？ 亡びしものは、亡びしものは、なつかしきかな、なつかしき哉……」

「……先生、それ、書いて送つて下さらない？……その代り、あたし、今……紹刺の稽古をして居りますの。紹刺で墓口こしらへて、お送りしますから……」

「墓口とは散文的だなア。」

やがて、みづうみ館の前に来た。

「ぢやあ。」

「……ええ、おからだ、おだいじに……」

今度の旅行で、最も見當のつかないのは美濃大井町であつた。飛驒高山は全く知らない土地だが、全く知らない土地だけに氣樂に考へられる。ところが、大井町はその町の人から案内を受けて行くので、大井にゐる間は何から何まで其の人に任せなければならぬ、それには少しの不安もないのだが、自由がきかないといふ事が、由比には苦手であつた。もつと困るのは、彼を大井町に招待してくれ、その唯一の名勝である、惠那峽を見物さしてくれ、田澤行夫といふ人を、よく知らない事であつた。年も知らない。何をしてゐるのかも知らない。その人の家が何の職業であるかも知らない。知つてゐるのは、その人も、その人の家も、大井町で有数の家、有数の人、であるらしいと云ふことだけであつた。だから、一切まかしても少しも不安がない事は確かである。さうして、大變都合のいい事である、と共に都合の悪い事もある。否、由比のやうな自由を

好む人、我儘な人には、都合の悪い事の方が多いかも知れないのである。――

先づどうして由比が田澤を知つてゐるかを述べるには、十一二年前に、由比が自分の家で仕事がよく出来ないで、自分の家から餘り遠くない所に仕事部屋を持ちたいと云ふ考へから、本郷の或る町にある高臺ホテルといふ所謂高等下宿の一室を借りた、といふ事から始めなければならぬ。高臺ホテルには、どういふ人々があるかを述べるには、それだけで一つの小説になる程であるから、この高臺ホテルで、由比は田澤と知合ひなつたと云ふ事だけに止めておく。

由比は、小説を書く事を仕事にしてゐたから、成るべく薄暗い部屋を望んだ。凡そ下宿をする人に薄暗い部屋を望む人は十人に一人もないだらうから、由比の部屋は、由比には高臺ホテル中で一番いい部屋であるが、ホテル経営者及び他の客には一番悪い部屋であつた譯である。その代り、十二疊敷であつた。その由比の部屋は、舊館（三階）の一階の隅にあつた。ところが、田澤の部屋は新館（三階）の塔の部屋であつた。塔の部屋といふのは、外から見ると、望樓の形をしてゐるから、非常に朗らかに思はれるが、場所が三階の上にあるのと、三疊位の部屋だつたので、この部屋は、高臺ホテルの中で一番悪い點で、由比の部屋と新館舊館の大關おほせきと云へるのであつた。尙、新館と舊館とは全く別の建物で、長い屋根のある廊下に連結されてゐた。さういふ譯だから、

若し高臺ホテルが、普通の下宿風であつたら、新館の大關部屋の借手の田澤行夫と、舊館の大關部屋の借手の由比祐三とは、一生相識る機会がなかつたかも知れない。従つて、由比が美濃大井町に乗り込む事もなかつたかも知れないのである。それでは、どうして彼等が知り合ひになつたかと云ふと、その譯は聞いて見れば實に何でもない事なのである。簡単に、その譯を述べると、この高臺ホテルの客は、新舊兩館の最上等の客も最下等の客も、従つて一階、二階、三階、塔の部屋の客も、悉く地下室の食堂で食事をしなければならぬ事になつてゐたからである、ほんの特別の場合を除いて。即ち、由比と田澤が譯なく知合になつた所以である。但し、多數の止宿人であり、従つて多數の違つた性格の持主が止宿人であるから、三年以上隣同士の部屋にゐても知合しやうごにならなかつた例も珍しくはないのである。――

由比と田澤が知合になつたのは大正十二年であつた。その頃の田澤行夫の生活と彼の部屋の様子を由比の其の頃の小説の一節から紹介しよう。「私（由比その人）はこの家の唯一の四階である塔の部屋に上つて行つた。これは二疊敷位の部屋で、寢臺一つと椅子と卓子とが一つづつある切りで、その他には何も置くどころか、人が二人と這入る餘地さへない部屋であつた。それにも拘らず、それが貸間になつてゐて、そこに秋田縣の豪農の三男で田澤といふ二十五歳の青年が往ん

でゐた。女のやうな優しい青年で、大人しく怒ることがないので、女中たちにも評判がよかつた。が、彼が何をしてゐる青年であるか、誰一人それを知る者はなかつた。本を読むのでもなければ、道樂をする風もない。朝はきちんと早く起き、夜は十時前には必ず床に就くらしかつた。友人が来る譯でもなく、友人を訪ねる様子もなかつた。が、初めてこの青年が私の注意を引いたのは、あの九月の大地震の時、大抵の懶者も、勤めを持つてゐる人の外は、何某にしても誰某にしても、汽車が通じると聞くと、混乱の中を物ともせず、故郷へ故郷へと歸つて行つた、田澤も一度は國に歸つてゐたらしいが、半月ほど立つと、何事もなかつたやうな顔をして上京して来て、地震前と同じやうに、毎日、早く起きて早く寝る、誰一人たづねる者もない。ただ、取得は、惡氣のない顔をしてゐる、といふだけである。」——由比はこの時分の田澤しか知らないのである。だから、彼等は、大正十二年九月初後に、二三月、高臺ホテルの食堂で顔を合した切りで、謂はば互にストレンジアなのである。——

初に述べた如く、九月末の關西地方の風水害の時、由比が出した何通かの見舞状の禮の返事の中に、今度關西地方へ旅行の節は必ず寄つてくれ、といふ手紙が二通あつた。一つが名古屋の岩木、他がこの大井の田澤なのである。その爲めに、中央線を選んだ事は前に述べたが、後になつ

て見ると、名古屋は成功し、大井は双方とも失敗したやうな事になつた。由比は、上諏訪を早朝に立ち、豫定の通り、午後二時半に、大井驛に著いた。この時、プラット・ホームに田澤だけが迎ひに出てくれてゐるものと思つて、彼は、汽車の中から見えた田澤の傍に歩いて行くと、田澤の後から、五六人の洋服を着た人間が續々と現れた。田澤に紹介されて。由比は夢中で、それ等の人々に挨拶をしておいたのだが、案内された惠那峽の遊覽船の中で、プラット・フォームと驛長室で貰つた無数の名刺を見て、何か變な氣がしたのであつた。驛長、助役、中學校校長、教員、小學校長、畫家、齒醫者等、十枚近くあつた。船の中で見た時は、こんな方面の知識に暗い彼には、何の事か殆ど分らなかつたが、案内された宿屋の部屋に落着き、案内して來た三四人の教師と、田澤と一緒に遅い夕食をし、教師等は皆歸り、後に田澤一人がぼかんと残されてゐたのを見た時、彼は初めて何か譯の分らない事が、譯の分らないままに、少しづつ分つて來たやうな氣がした。それは、翌日、彼が高山へ立たうと云つた時、昨日は新舊驛長の迎送會があつたので、主な者がその方へ行つたから、今夜、歡迎會をしたいから是非もう一晚滞在してくれ、と云つた時だつた。彼は、遊びに來たのか、後で何か名勝案内記でも書かす爲めに遊覽船に乗せられに來たのか、彼等の會を一つ殖やす爲めに自分を囿に止め置くつもりなのか、——中で後の二つが當つて

ゐるらしい、と考へられて来た。併し、結局、彼には、何が何だか、分らなくなつたので、田澤にも誰にも知らさないで、その翌朝、隣の驛まで自動車を飛ばし、そこから名古屋行の汽車に乗つたのである。

(附記、作者として残念で仕様のないのは、主人公を豫定通り名古屋と大阪まで旅させられなかつた事、否、諏訪にも、大井町にも語り残した事があり、又、高山に於ても書かればならぬ事があり、結局この主人公が、名古屋と、大阪その他で新しい経験をし、いろいろの變つた男女に會ふ話を讀者に傳へられなかつたことである。で、これは未定稿である。)

跋

考へるところがあつて、近作に屬するもの六篇、舊作に屬するもの六篇、都合十二篇あつて見た。左に、製作の年代順に並べて見る。

一と踊	大正九年五月
八木彌次郎の死	大正九年十二月
四人ぐらし	大正十二年四月
鼻提灯	大正十三年三月
夏の夜語	大正十四年八月
日曜	昭和二年三月
枯野の夢	昭和八年三月
海戦奇譚	昭和八年五月
歴史問	昭和九年五月
人間往來	昭和九年十月

夢の跡
終の栖

昭和十年六月
昭和十年十月

考へるところ——と云ふのは、近作に属するものだけでは餘り單調に過ぎると思つて、舊作を交せて幾らか目先を變へ、出来るだけ世の人人を退屈から救ふように、と考へた、——唯、それだけのことである。唯一つ、『夏の夜語』は殆ど同時に出版する評論隨筆集の中に收めるつもりのもを、間違つて此の集に入れた事を、世の人人に詫びておく。

殆ど同時に出版する評論隨筆集の『跋』にも書いたが、この集を校正してゐる間に、七十一歳の母が、昭和十年十月十五日、永眠した。この集の中に、所謂「私小説」に最も類する小説が、四篇はひつてゐる。その中の三篇——『一と踊』、『夏の夜語』、『四人ぐらし』——には、この母が書かれてゐる。かういふ事は誠に私事であるが、私の小さい人生に取つては、一つの事件であるから、書き添えた。慶應元年に生れ、慶應と、明治と、大正と、昭和十年までを、生きつづけた人であるから、よくぞ生きた、と云つてよい。併し、

私には善かれ悪かれ苦樂を共にした人であつたから悲しい事であつた。

尙、この文章の中に使つた「世の人人」といふ言葉は、私の尊敬する歌人、齋藤茂吉の用語である。

昭和十年十一月

宇野浩二

來往間人



昭和十一年一月十日印刷
昭和十一年一月十五日發行

〔定價壹圓八十錢〕

著者 宇野浩二

發行者 岩崎四郎

東京市芝區西久保櫻川町七番地

印刷者 中村勝藏

東京市芝區新橋六丁目七四番地

東京市芝區西久保櫻川町七番地

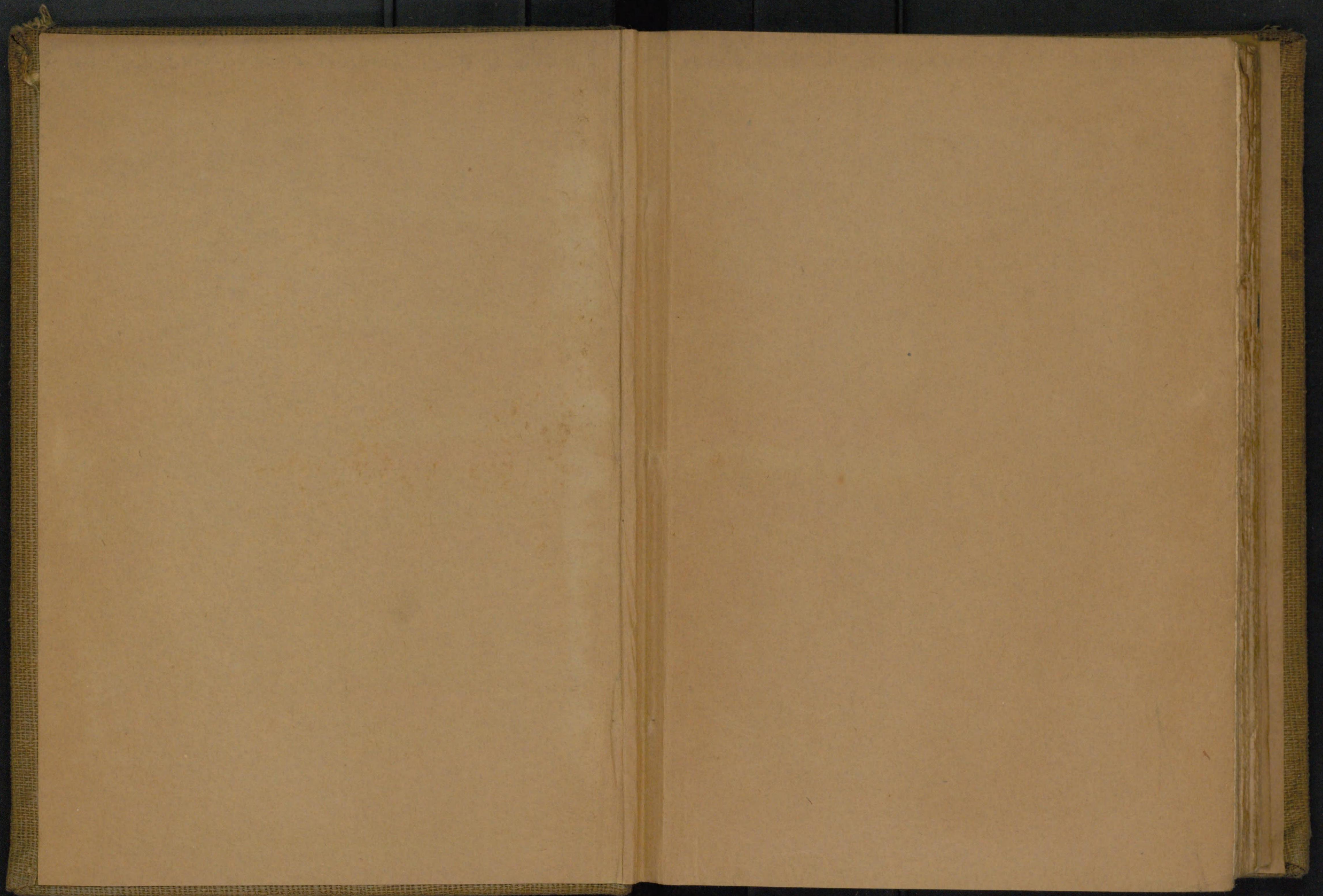
發行所 黎明社

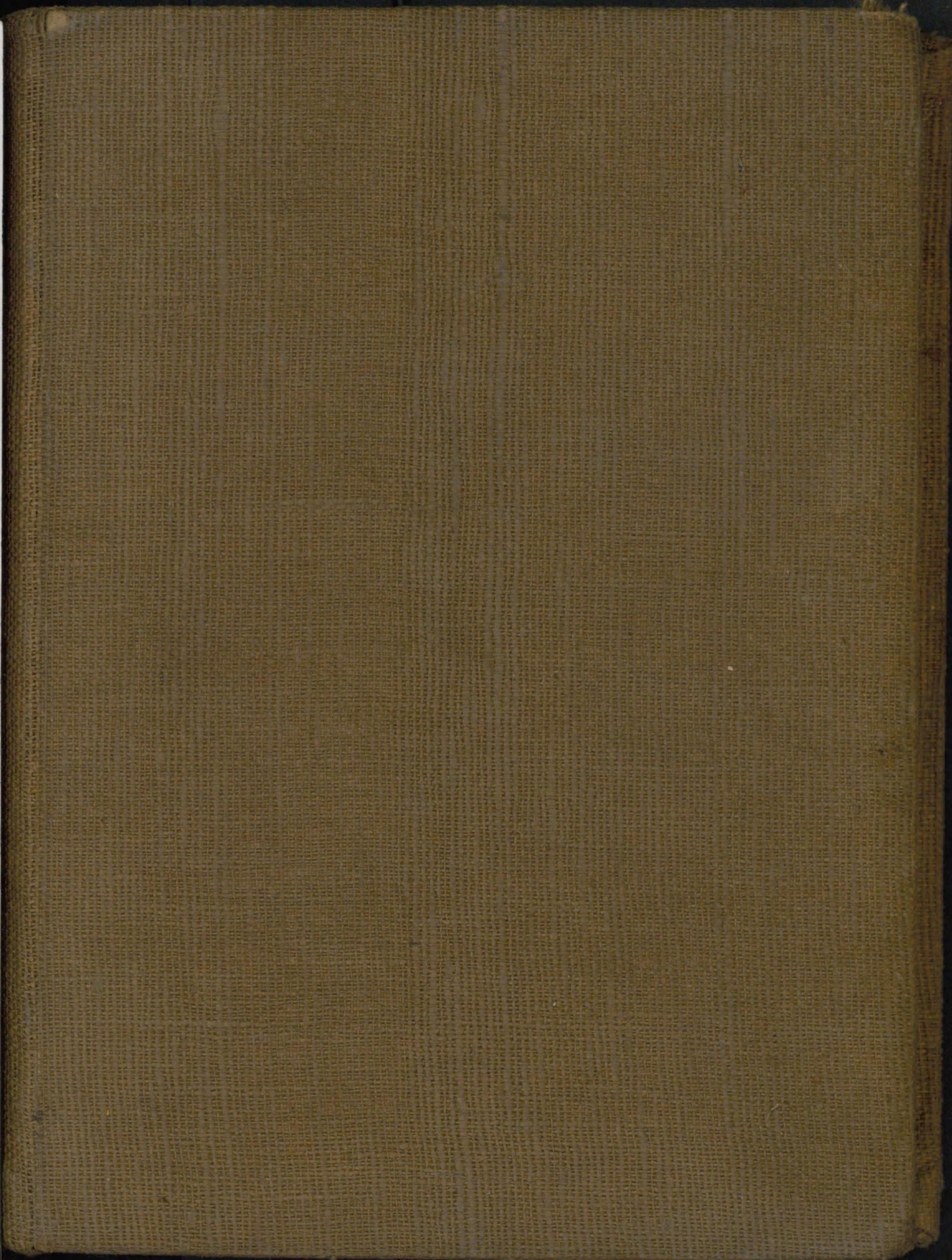
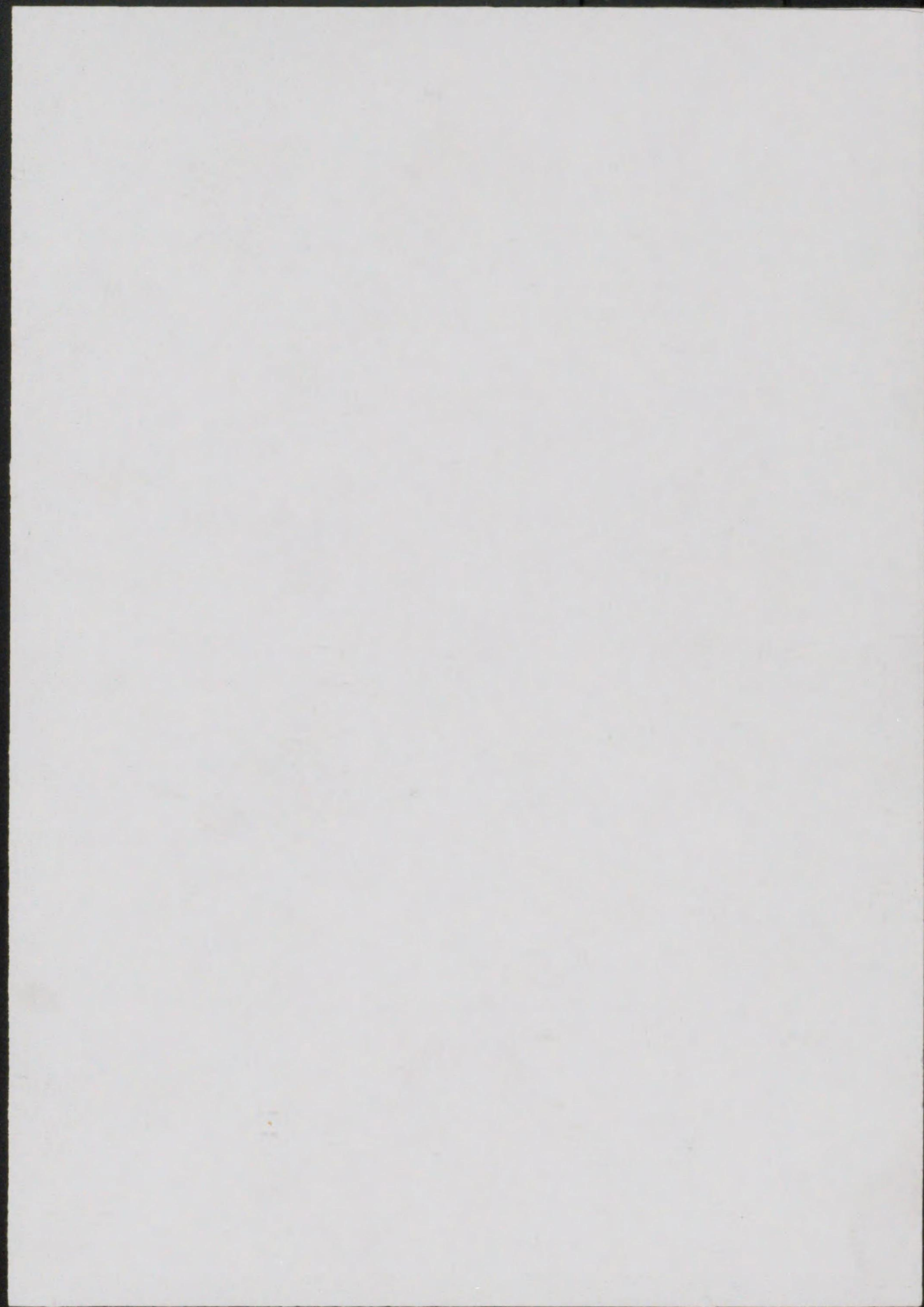
電話芝(43)二三六四番

振替口座東京六六〇六七番

版社明黎

尾崎士郎著	悪太郎	藝術家として最も脂ののり切つたこの作家の眞剣な藝術を味ふには本書以外になし。	四六判 三九〇頁函入 定價 一圓五十錢 送料 十四錢
廣津和郎著	一時期	明快な筆致で人生の機微を巧みに捉へた廣津氏のこの創作集は現文壇の偉觀である。	四六判 四〇〇頁函入 定價 一圓八十錢 送料 十四錢
細田源吉著	處女日程	美貌の處女三人を捉へ來つて複雑な戀愛過程を描いた素晴しき長篇小説である。	四六判 五五〇頁函入 定價 二圓三十錢 送料 十四錢
宇野浩二著	人間往來	人情の極致を描いた宇野氏の文學は、今や枯淡の域に達し、糊めども盡きぬ滋味を藏す。	四六判 五二六頁函入 定價 一圓八十錢 送料 十四錢
菊池 寛著	日本武將譚	史上に燦たる名將、智將を描ける菊池氏の史眼は明快無比。日本精神を顯揚せる好箇の物語。	四六判 四四〇頁函入 定價 一圓五十錢 送料 十四錢
七段 鈴木爲次郎著	圍碁指南	ザル碁の人もこの書を読めば初段位までは上達する。著者はそこに力を入れて書いた。	菊判和装 函入 定價 一圓五十錢 送料 十二錢
秋田縣立大館高等女子學校スキー部編	女子スキー讀本	スキーを一般女性にもつともつと普及獎勵したい念願から書かれた唯一の女子スキー入門書。	四六判 二五〇頁 定價 一圓 送料 十錢



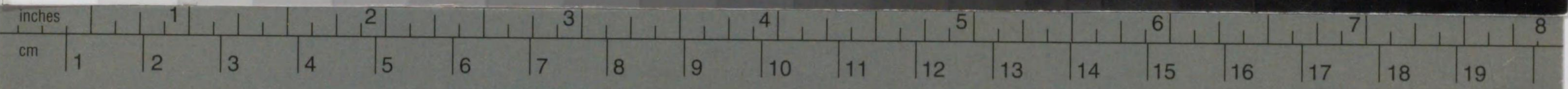


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

